長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡

－第16次・第29次発掘調査報告書－

2024.1

松本市教育委員会

例言

1　本書は、令和４年７月１日～令和５年１月 23 日に実施された、長野県松本市芳野 358 番地 49 他に所在する出川南遺跡第 29 次発掘調査の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は、長野県による県道寺村南松本駅停車場線の道路改良事業に先立って長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会で発掘調査の実施、本書の作成を行ったものである。

3　本書では、出川南遺跡第 29 次発掘調査報告に加え、同事業で平成 23 年度（平成 23 年５月 30 日～７月 29 日）実施の同遺跡第 16 次発掘調査（所在:長野県松本市双葉 358 番地 81 他）についても報告する。

4　本書の執筆は次のとおり。

第４章３節：草間厚伸、その他：澤柳秀利

また、信州大学特任教授大塚勉氏による地質調査及び石材鑑定をしていただく機会を得た。またその結果を第４章第５節として寄稿していただいた。

5　本書の作成にあたっての作業分担は以下のとおり。

遺物洗浄・注記・接合復元：内田和子、中澤温子、三澤栄子

遺構図調整・デジトレ：荒井留美子

写真（現場）：澤柳秀利、伊藤蔵之介、写真（遺物）：宮嶋洋一

6　本文・図・表中で用いた遺構の略称は次のとおり。

溝址：溝、自然流路：流路

7　図中で用いた方位記号、座標軸は方眼北を指している。

8　本書作成にあたり参考とした文献名は巻末 26 頁に一覧で記載した。

9　本書で用いた古代の土器・陶磁器の時期区分、用語については文献１に従った。

10　発掘調査と本書作成にあたって次の方々から御教示・御協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。

窪田雅之（旧公図照会）、村田正幸（芳川地区の水路：芳川歴史研究会）、宮嶋洋一（古写真提供）

11　本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒 390-0823 長野県松本市大字中山 3738-1 ℡ 0263-86-4710）に収蔵されている。

目次

例言・目次

第１章　調査の経緯 …… 3

第２章　遺跡の環境 …… 5

第１節　地理的環境 …… 5　第２節　歴史的環境 …… 5　第３節　過去の調査概要 … 6

第３章　調査成果 …… 8

第１節　調査の概要 …… 8　第２節　遺構 …… 10　第３節　遺物 …… 15

第４章　総括 …… 16

第１節　遺跡の「空白地帯」 …… 16　第２節　見つかった近代の水路跡 … 17

第３節　南松本地域における近代の開発とその展開 … 21　第４節　高度経済成長期の「遺物」… 23

第５節　出川南遺跡の礫組成からみた奈良井川の影響 … 24　第６節　結語 …… 26

写真図版

報告書抄録

第１章　調査の経緯

第１節　調査経過

平成３年（1991）、松本市により東日本旅客鉄道株式会社（以下「ＪＲ」という）南松本駅南所在の、宮田前踏切の渋滞緩和のためのアンダーパス計画が策定され、長野県松本建設事務所（以下「建設事務所」という）により事業化が進められてきた。平成21年（2009）より建設事務所と松本市教育委員会（以下「市教委」という）による保護協議が進められ、市教委による平成23年度の16次調査、24年度の23次調査、長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という）による平成26～27年度の27・28次調査が実施されてきた。

一連の事業における最終の埋蔵文化財調査として、本年度同事業（令和３年度　国補街路（踏切道改良計画事業）事業）の計画がされたため、遺跡が破壊される範囲について発掘調査を実施して記録保存を行うこととなった。発掘調査とそれに係る事務を市教委が行うこととし、建設事務所と松本市の間に令和４年３月31日付で発掘調査業務委託契約が締結された。

現地での発掘調査は、令和４年７月１日から令和５年１月23日まで実施した。発掘終了後令和５年１月30日付で松本警察署に文化財発見通知、２月７日付で長野県教育委員会（以下「県教委」という）に発掘調査終了報告書を提出した。整理作業は令和４～５年度に行い、令和６年１月31日に発掘調査報告書（本書）を刊行した。本発掘調査に係る文書等の記録は以下のとおりである。

＜令和３年度＞

３月31日　建設事務所と松本市が埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約締結
（業務名：令和３年度　国補街路（踏切道改良計画事業）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務）

＜令和４年度＞

１月30日　「文化財発見通知」を松本警察署に提出
２月７日　「発掘調査終了報告書」を県教委に提出
３月７日　建設事務所と松本市が埋蔵文化財発掘調査業務委託契約の一部を変更する契約を締結

＜令和５年度＞

６月６日　令和５年度　国補街路（踏切道改良計画事業）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約締結

第２節　調査体制

＜令和４年度＞

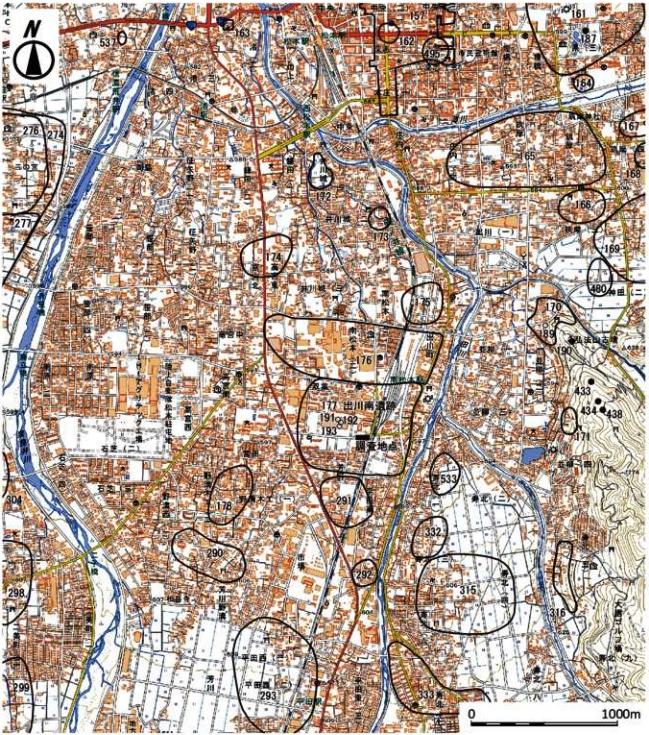
調査団長　伊佐治裕子（松本市教育長）
調査・整理担当　澤柳秀利（主査）、伊藤蔵之介（会計年度任用職員）、直井雅尚（同）
事務局　文化財課　竹原　学（課長）、百瀬耕司（埋蔵文化財担当係長）、草間厚伸（主任）、吉見寿美恵（会計年度任用職員）

＜令和５年度＞

調査団長　伊佐治裕子（松本市教育長）
整理担当　澤柳秀利（主査）、直井雅尚（会計年度任用職員）
事務局　文化財課　竹原　学（課長）、百瀬耕司（埋蔵文化財担当係長）、草間厚伸（主査）、吉見寿美恵（会計年度任用職員）

協力者

赤羽幸子、荒井留美子、市川二三夫、岩井健一郎、内城悦子、内田和子、黒崎　奨、小林伸一、小林秀行、坂口ふみ代、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、辻　章江、富岡享子、直井知導、中澤温子、平野宗彦、古幡大治朗、前沢里江、丸山　恵、三澤栄子、宮澤昭敏、宮嶋洋一、村山牧枝、百瀬二三子、柳澤千代美、山田幹夫、吉澤恵子



遺跡

161 県町遺跡　162 本町南遺跡　164 埋橋遺跡　165 筑摩遺跡　166 三才遺跡　167 筑摩北川原遺跡
168 筑摩南川原遺跡　169 神田遺跡　170 平畑遺跡　171 山行法師遺跡　173 小島遺跡　174 高宮遺跡
175 出川遺跡　176 出川西遺跡　177 **出川南遺跡**　178 五輪遺跡　274 新村・島立条里的遺構　276 三の宮遺跡
277 北梨遺跡　290 野溝遺跡　291 平田北遺跡　292 平田遺跡　293 平田本郷遺跡　298 下二子遺跡
299 中二子遺跡　304 大久保原遺跡　315 竹淵遺跡　316 瀬黒遺跡　332 竹淵南原遺跡　333 向原遺跡
480 神田西遺跡　495 天神西遺跡　533 寿畑田遺跡

城館跡

157 松本城下町跡　163 渚城址　172 井川城址　537 清水城跡

古墳（●：顕在、○：湮滅）

187 県塚１号古墳　189 平畑１号古墳　190 弘法山古墳　191 平田里１号古墳　192 平田里２号古墳
193 平田里３号古墳　433 中山北尾根１号古墳　434 中山北尾根２号古墳　438 中山北尾根3号古墳
※　番号は松本市遺跡台帳記載の遺跡番号　背景地図：国土地理院電子国土

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

出川南遺跡は松本市芳野・双葉・出川町・平田１丁目の４地区にまたがる市内でも屈指の大遺跡で、東西約800ｍ、南北約500ｍを測る。付近一帯は古くから畑地として利用され、特に明治時代以降は桑畑として利用されていたようである。また遺跡範囲の北半が旧松本市(松本村)、南半が旧芳川村(平田村)という行政境でもあったためか民家も少なく、東側を通る旧善光寺街道沿いに出川町の街並みがあった程度である。昭和戦前期以降工業用地として、戦後は公営住宅が建設されたほか商業地としても発展をして市街地化が著しく進み、現在では松本市でも有数の住宅地となっている。

遺跡の東に接して田川が、西方には奈良井川が流れている。遺跡周辺の標高は593 ～ 598ｍで、南から北に向かって緩やかに傾斜しており、明治時代の地形図を見ると、奈良井川扇状地の末端を示す広間隔の等高線が示されている。遺跡範囲の中央部には、南から北に流れる穴田川が流れている。詳細については後述するが、現在の穴田川は、塩尻市広丘堅石で取水された農業用水四ヶ堰(しかせぎ)の流末である。今回の調査地は、特に下層では奈良井川の影響を強く受けているといえるが、田川の影響もあったと考えられる。

本遺跡の北にある出川西遺跡の北端部、現在のやまびこ道路付近より北側は奈良井川扇状地扇端部の湧水帯で、かつては水田域であった。このあたりから穴田川や頭無川などの小河川も水量を増して北流する。

第２節　歴史的環境

周辺の遺跡分布は田川右岸、奈良井川左岸、田川と奈良井川に挟まれた地域の３地域に大別できる。

田川右岸は、近世以降に牛伏川の氾濫の影響を強く受けており、氾濫による破壊を免れたものが周知の遺跡として知られている。縄文時代は、竪穴住居址は現在のところ見つかっていない。弥生時代になると、環濠が確認された百瀬遺跡のほか、竹淵遺跡などで集落が確認されている。古墳時代には、前期初頭３世紀末には史跡弘法山古墳が築造され、その南東方向の中山地区には中山古墳群がある。古代では、百瀬遺跡や向原遺跡などで集落が確認されている。中世では百瀬遺跡で井戸跡など13世紀の遺構が確認されている。

奈良井川左岸では、縄文時代から弥生時代にかけての集落は確認されておらず、南栗遺跡などで縄文土器が若干出土しているのみである。古代になると７世紀後半に大規模な集落が営まれるようになり、下神・南栗・北栗遺跡などで数多くの住居址が見つかっている。この一帯は奈良井川の河岸段丘上で水利は悪いが、計画的な開発によって集落が形成されたと考えられている。戦国時代には島立地区荒井に清水城が築かれた。

田川と奈良井川に挟まれた地域の遺跡には本遺跡が含まれる。この一帯には縄文時代の遺構はほとんどない。弥生時代の遺構は、本遺跡17・22次調査など主にＪＲ篠ノ井線東側を中心とした部分から見つかっている。古墳時代にはこの一帯で大規模な集落が多く存在していたようで、その様子は、本遺跡をはじめ北に隣接する出川西遺跡、南に隣接する平田北遺跡、平田本郷遺跡などで行われた数多くの発掘調査により、少しずつ全貌が明らかになりつつある。このあたりは奈良井川の影響を受けただけでなく、水利についても奈良井川由来の流路に依存していたようで、特に平田本郷遺跡第３次調査では何条かの溝址が見つかっている。これらは奈良井川系統と考えられ、流路を管理するためとみられる護岸ともいえる石積みを施したものもあり、平安時代前期にはこのような水路によって集落が営まれていたものと思われる。平安時代後期になるとこうした奈良井川からの流路は縮小していき、安定離水域となった平田本郷では集落が展開するようになってくる。対してその下流域にある出川南遺跡などでは、水利が絶えたためか集落が営まれなくなったものと思われる。室町時代には信濃守護小笠原氏の居館が井川城に、また渚には渚城が築城されている。江戸時代以降も水利に恵まれず、主として奈良井川からの堰による取水によって水田耕作が営まれてきた。

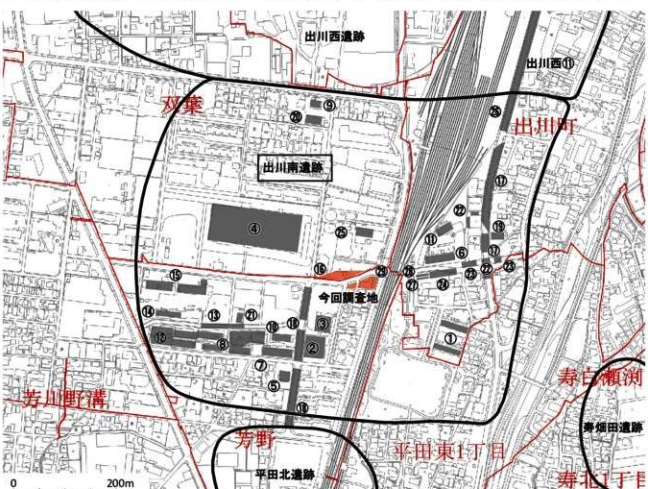
第３節　過去の調査概要

出川南遺跡は、北に隣接して出川西遺跡、南に隣接して平田北遺跡があり、この一帯は本市南部において特に遺構・遺物が多く見つかっている地域である。本遺跡の発掘調査は、当地区の開発が本格化してきた昭和61年の市営住宅建設に伴う第１次発掘調査からはじまる。以降公民館などの公共施設、道路築造、大型店舗、県営住宅といった原因事業による緊急発掘調査が増大してきた(第２図、第１表参照)。

平成３年の第４次調査では、古墳時代後期を中心に住居址が116軒見つかったほか、松本市内では数少ない埴輪を伴う中期古墳（平田里古墳群）が発見された。平成10年の第５次調査では、281㎡という狭い面積の中から古墳～平安時代の住居址が11軒重複して見つかり、本遺跡の遺構密度の高さが明らかになった。平成22～23年に実施した17次調査では、弥生時代～中世の106軒の住居址のほか、様々な埋葬施設も見つかっている。平成25年に実施した第23次調査では、弘法山古墳と同時期の古墳時代前期前半土器が出土した。平成27・28年度実施の27・28次調査では、西端から穴田川旧流路ともみられる大規模な流路跡が見つかり、それを挟んで東西で遺跡の性格が異なることがわかってきた。

このように、現在までの調査によって、古墳時代を中心として弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が数多く確認されているとともに、場所によってそれらが見つかる深さは一定ではなく、また複数の時代の遺構があることから検出面も複数あるという、複雑な遺跡であることもわかってきた。

一方、奈良井川扇状地末端であることから、奈良井川のほか田川など河川の影響を強く受けている地域でもある。第４次調査や第25次調査などでは概ね南から北に流れたとみられる流路跡が見つかっている。いくつかの調査で石材の鑑定を実施したところ、奈良井川、田川それぞれの系統の河川礫が確認されている。



※　○数字は次数を表す。26次調査は出川西遺跡11次と同一調査。

第２図　出川南遺跡範囲と過去調査地

調査次	調査年	面　積	原因事業	調　査　成　果	備　　考
1	昭和61年 (1986)	1325㎡	市営住宅	住居址5(弥生後1、古墳前1、平安前1、平安後1)　掘立柱建物址1、竪穴状遺構1、土坑1、溝4	遺構面２枚(上:平安、下:弥生後～古墳前)
2	昭和63年 (1988)	1715㎡	体育館	住居址1(古墳後)、土坑26、ピット61、溝1	
3	平成元年 (1989)	900㎡	公民館施設	住居址6(古墳後～平安前)	
4	平成３年 (1991)	14688㎡	大型店舗	住居址116(古墳後113、平安前2、平安後1)、掘立柱建物址21、柱列2、土坑7、ピット多数、溝11	古墳中期の平田里古墳群(1～3号)も調査
5	平成10年 (1998)	281㎡	共同住宅	住居址11(古墳後1、奈良1、平安前5)、土坑6、ピット11	高密度な遺構分布を確認、遺跡範囲拡大
6	平成10年 (1998)	1486㎡	共同住宅	住居址4(弥生後3、古墳後1)、竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、土坑3、ピット55、溝6	遺構面２枚(上:古墳後以降、下:弥生後)
7	平成10年 (1998)	867㎡	県営住宅	住居址50(古墳後～奈良11、平安前39)、掘立柱建物址1、土坑175、ピット13、溝2、遺物集中2	
8	平成11年 (1999)	3293㎡	県営住宅	住居址48(古墳後7、奈良～平安23)、掘立柱建物址1、土坑144、溝1、遺物集中2(古墳中)、流路2	遺構面２枚(上:古墳後以降、下:古墳中)
9	平成11年 (1999)	240㎡	共同住宅	住居址2(古墳後)、土坑4、ピット7、遺物集中2(古墳前)	
10	平成11年 (1999)	560㎡	県営住宅	住居址4(平安前)、ピット5、溝1	
11	平成13年 (2001)	188㎡	共同住宅	住居址3(弥生後1、平安後2)、土坑7、ピット234、溝1	
12	平成13年 (2001)	2197㎡	県営住宅	住居址13(古墳後1、奈良10、平安2)、土坑34、ピット70	
13	平成14年 (2002)	25㎡	市道	住居址2(時期不明2)	トレンチ調査
14	平成19年 (2007)	383㎡	県営住宅	住居址2(古墳後2)、掘立柱建物址2、土坑9、ピット11、溝5	
15	平成21年 (2009)	1839㎡	県営住宅	住居址15(古墳後2、奈良4、平安前9)、土坑29、ピット39、溝8、石積遺構1	
16	平成23年 (2011)	89㎡	踏切改良 出川双葉線	溝2(近世)	今回報告
17	平成22・23年 (2010・11)	4624㎡	小池平田線	住居址106(弥生中32、古墳54、奈良～平安16、中世4)、掘立柱建物址7、竪穴状遺構4、土坑・ピット多数、埋葬施設38(縄文晩～中世)、溝29	遺構面２枚(上:古代～中世、下:弥生～古墳)
18	平成24年 (2012)	2362㎡	芳野双葉線	住居址70(古墳後～平安前)、掘立柱建物址12、土坑222、ピット151、溝7	
19	平成24年 (2012)	158㎡	共同住宅	住居址1(弥生)、土坑8	
20	平成24年 (2012)	502㎡	事務所	住居址9(弥生中～古墳後)、掘立柱建物址1、土坑・ピット多数、溝3	遺構面２枚(上:古墳中～後、下:弥生中)
21	平成25年 (2013)	341㎡	芳野町集会所	住居址12(古墳後2、奈良3、平安前7)、土坑1、ピット9	
22	平成25年 (2013)	616㎡	小池平田線	住居址20(弥生・古墳・平安)、掘立柱建物址1、竪穴状遺構5、土坑・ピット35、溝17	遺構面２枚(上:古代～中世、下:弥生～古墳)
23	平成25年 (2013)	428㎡	出川双葉線	住居址8(弥生・古墳・平安)、掘立柱建物址1、土坑・ピット80、溝16	遺構面３枚(上:中世、中:古墳、下:弥生)
24	平成26年 (2014)	2920㎡	踏切改良 出川双葉線	住居址1(古墳中)、掘立柱建物址1、土坑7、溝7、ピット列5、ピット210	遺構面２枚(上:中世～古代、下:古墳)
25	平成26年 (2014)	647㎡	市総合社会福祉センター	住居址9(古墳・平安)、土坑12、溝5、墓1	遺構面２枚(上:平安、下:古墳)
26	平成26年 (2015)	395㎡	小池平田線	住居址25(弥生中)、土坑48、ピット76、溝4、墓2、畝合群2	出川西遺跡11次と一体調査
27	平成27年 (2016)	198㎡	踏切改良 出川双葉線	竪穴状遺構1、溝5、ピット列2、土坑2、ピット140	遺構面２枚(上:中世～古代、下:古墳)
28	平成28年 (2017)	528㎡	踏切改良 出川双葉線	竪穴状遺構2、溝1、ピット列3、土坑12、ピット90	遺構面２枚(上:中世～古代、下:古墳)
29	令和４年 (2022)	290㎡	踏切改良 出川双葉線	溝1(近代)、流路1	今回報告

※24・27・28次調査は県埋文センターで実施した。

第１表　周辺調査一覧

第３章　調査成果

第１節　調査の概要

１　調査面積・調査区・調査期間

第16次調査は対象面積750㎡のうち、事前の試掘調査で遺物が出土した範囲を拡張する形で89.4㎡の調査を行った。第29次調査は対象面積850㎡のうち、市道5112号線を挟んで東側をＡ区、西側をＢ区としてＡ区280㎡、Ｂ区はトレンチ調査10㎡の調査を行った。なお、Ａ区は排土置場の関係上南小区、東小区、北小区（トレンチ）、北西小区（トレンチ）、南東小区の５小区に分割し、小区ごとに調査を進めた。いずれも安全空地・建設重機の可動範囲を除いた範囲で実施した。第16次調査は平成23年５月30日から同年７月29日まで、第29次調査は令和４年７月１日から令和５年１月23日まで、それぞれ実施した。

２　調査方法

各調査とも建設重機により遺構検出可能な深度まで表土を除去し、遺構検出・掘り下げについては人力で行った。なお、部分的に下層の堆積状況確認のためのトレンチを掘削した。測量についてはトータルステーションによる三次元実測及び遺り方測量の併用で行った。写真については第16次調査は一眼レフカメラ及びデジタルカメラ、第29次調査はデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した。

３　各調査の概要

⑴　第16次調査

平成23年度に試掘調査を行ったところ、遺物の出土をみたためその部分を拡張する形の調査となった。細長い調査区の上、現代の整地層が130㎝に及んだため、犬走を設けて東西方向のトレンチ調査となった。現代整地層の下層も近世の整地層が100㎝に及び、そこから２条の溝を検出したのみで、いずれも近世以降の溝と考えた。遺物は土師器片が５点出土したが、全て砂礫層中であり遺構に伴うものではない。

⑵　第29次調査Ａ区

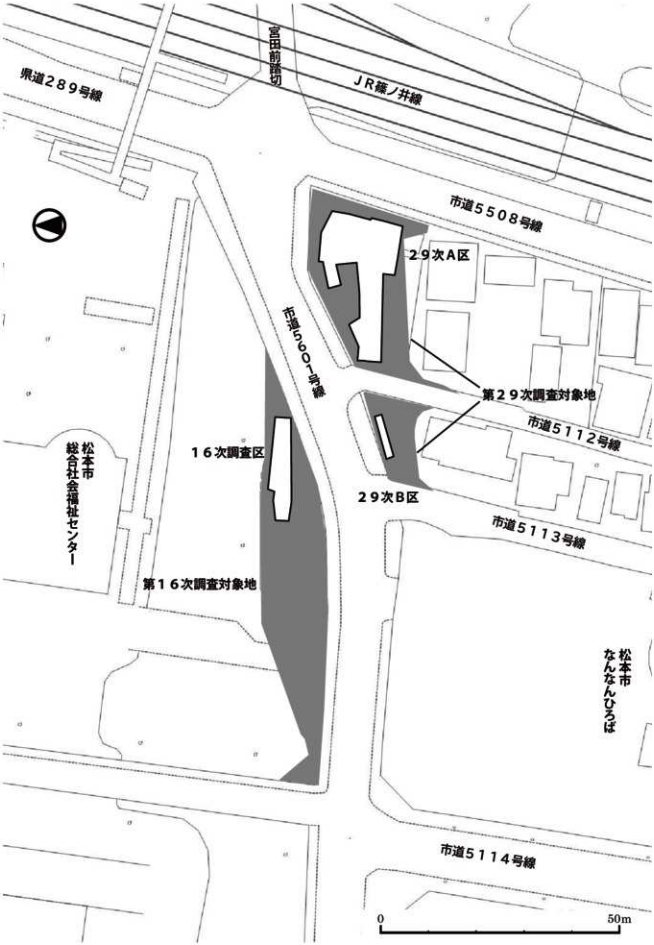
東西方向の土層確認も兼ねて南小区を設定した。地表下70㎝で生活面と考えられる面があったため一旦止めたが、トレンチ調査の結果流路堆積の土層の差によるもので、西から東に向かって緩やかに傾斜するシルト質・砂礫層が交互に堆積する状況を確認したため、大規模な流路と判断した。東端部で南北方向の撹乱を確認したが、近代以降の溝として調査した。その溝の範囲を確認するため東小区を設定して調査した。溝を挟んで東と西で堆積状況の違いを確認した。東西とも流路堆積であるが、西側は砂礫流路、東側はよく締まったシルト質の流路堆積である。北小区と北西小区は、撹乱を受けていることを確認するためのものである。南東小区はシルト質堆積の下層を再確認するためのものであった。なお、近代の溝以外の遺構は存在しなかった。遺物は古代の土器片が若干あったがいずれも摩耗が激しく流れ込みによるものと判断した。それ以外は近世～近代の陶磁器、ガラス製品などが溝覆土を中心にみられた。

⑶　第29次調査Ｂ区

一部を除いてアスファルト舗装となっていたため、未舗装部分にトレンチを掘削して、遺構がある場合は拡張することとしたが、地表下150㎝まで昭和30年代の整地層が及んでおり、遺構の確認はできなかったためトレンチ調査のみにとどめた。遺物は白磁碗小片などがみられたものの、整地土中であるため遺構に伴うものではない。昭和30～40年代の牛乳瓶、同時代の即席ラーメンの包装袋などを確認した。

４　遺構の名称

両調査において検出した遺構は溝址のみであるため、名称はそれぞれ調査次＋遺構番号とした。したがって第16次調査では溝が２条なので1601号溝址と1602号溝址、第29次調査では溝が１条なので2901号溝址となる。



第３図　調査対象地及び調査区位置図

第２節　遺構

１　溝址

1601号溝址

調査区東寄りで検出した。確認された規模は幅35㎝、深さ55㎝、長さ70㎝で断面形は不整長方形を呈する。方向は南北を指向する。内部構造は覆土下層に蓋石状と水路状の石組が設けられている。時期について、本址からの遺物はないが、時期及び用途については、近世耕作土の下層であるので、耕作地整備に伴って設けられた暗渠であると考える。

1602号溝址

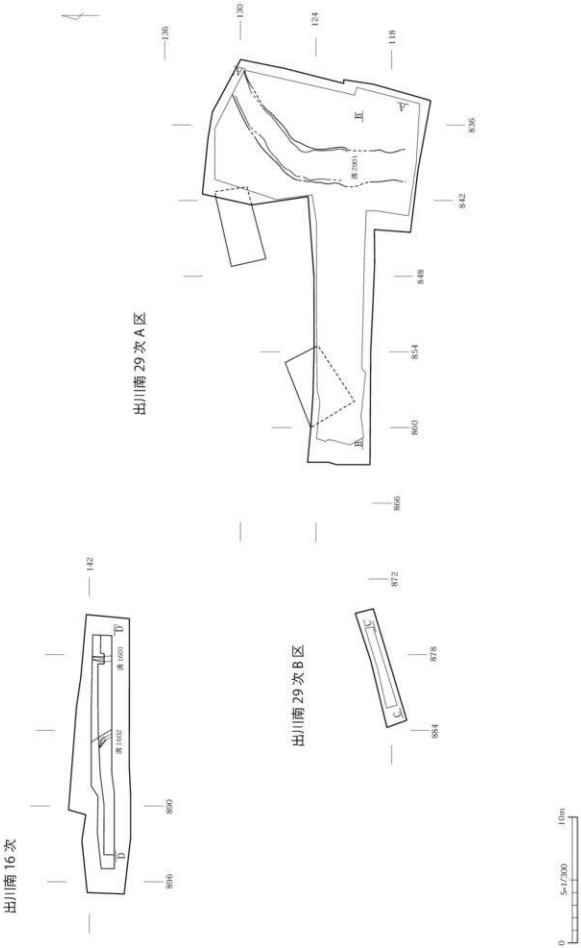
調査区中央部で検出した。確認された規模は幅32㎝、深さ17㎝、長さ70㎝で断面形は半円形を呈する。方向は概ね南東から北西を指向する。時期について、本址からの遺物はなく、中世の堆積層の上層にあたることからそれ以降になると考えられる。用途は明らかにできなかったが、流路の可能性がある。

2901号溝址

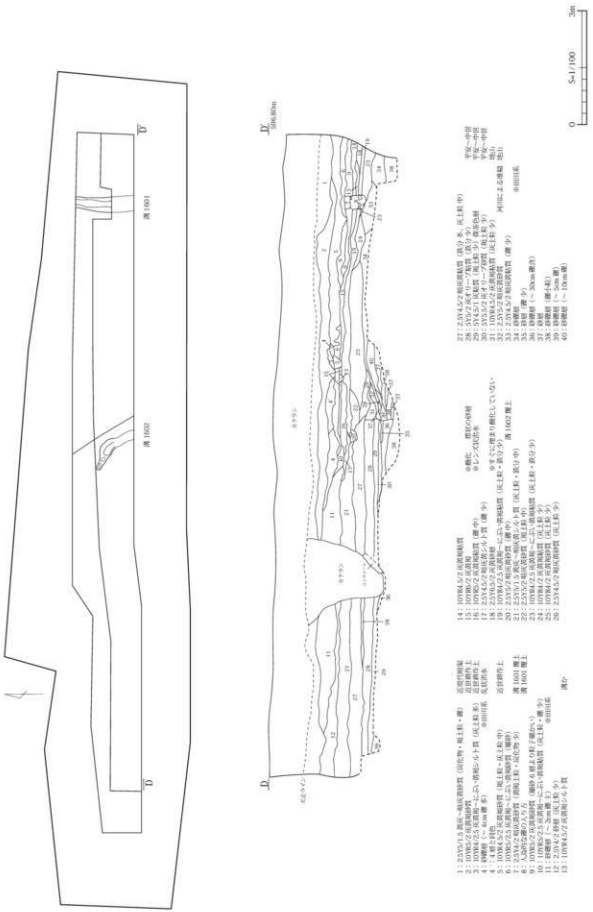
Ａ区東小区で検出した。調査区の南西隅から北に流れ、北東隅に向かって弧を描いている。規模は南壁の土層では幅330㎝、深さは100㎝を測る。確認した長さ（中心線）は1300㎝で、断面形は半円形である。構造は基本的に素掘りの溝で、西側側面には底部に胴木を配し、その上段には20～30㎝程度の石による３～４段の石積みが施されるが、大半は攪乱によって失われている。残存する石積みの背後にはグリ石状の礫がみられる。東側側面は素掘りのみであるが、部分的に５～10㎝程度の杭が不規則に打ち込まれていた痕跡を確認した。また南半部の底部から、溝を横断する形での木組み遺構を検出した。本址に関わるものと考えられるが、用途等についてはわからない。木組みの留め具には鉄製ボルトが用いられているため、これらは近代の所産と考える。遺物はガラス瓶のほか近世から近代の陶磁器が主体を占めた。古代の遺物として須恵器片も数点出土しているが、摩耗が激しく上流からの流れ込みによるものとみられる。用途としては形状・溝の方向などから水路が想定され、現在調査区東横を溝渠（一部暗渠の開渠）として流れる穴田川の前段階のものと考える。穴田川とすれば、その上流は塩尻市広丘堅石で取水された四ヶ堰の流末部（平田堰）となる。本址の開削時期について明らかにすることはできないが、トレンチの所見では、明らかに近代である流路と、それに切られるひとつ前の段階の流路とみられる砂礫層を確認できたことから、もともとあった穴田川を、四ヶ堰の流末として整備した可能性がある。四ヶ堰の完成が明治５年（1872）であるので、それに伴って同時期に整備されたと考える。石積み及び木組み遺構はそれ以降の改修によるものとみられるが、詳細な時期は不明である。本址の廃絶時期は、昭和戦前期にこの一帯が工業用地化された際に水路の付け替えが行われたとみられるので、その際に埋め立てられたと推察される。

２　流路跡

16・29次調査のいずれからも、砂礫層の堆積が広範にみられた。特に29次調査では、東小区で近代の溝址を確認した以外の部分は流路堆積であった。出川南遺跡第４次発掘調査報告書でも述べているとおり、本遺跡のある一帯は奈良井川による堆積が広がっており、洪水性の流れが発生したことも考えられる。信州大学特任教授大塚勉氏からも、松本盆地の南半部は奈良井川の影響を強く受けていると指摘をいただいた。また、詳細については後述するが、Ａ区南壁の土層全体で確認された流路堆積は西から東に向かって傾斜していることから、概ね南西→北東の流れを示していることを確認できた。これは奈良井川に由来すると考えられる。Ｂ区が深さ150㎝まで近現代の整地層（攪乱）となっているため流路の幅は不明だが、最大で50m以上はある大規模なものであった可能性がある。時期については、Ａ区南小区西端付近を中心に平安時代前期の遺物が若干出土していることから、上流にあった平安時代前期の遺構から流出したものである可能性があるため、古代から近世までの幅広い時期が想定されるが、詳細な時期はわからない。

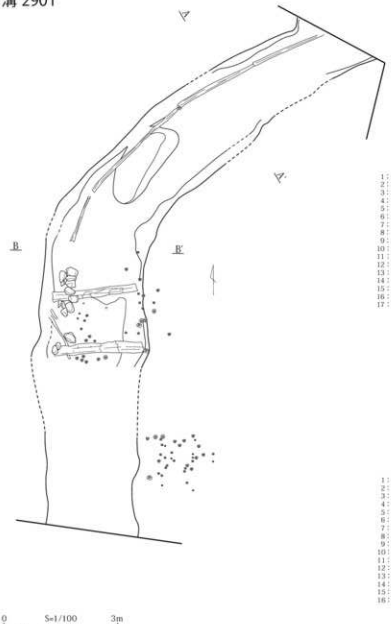

出川南 29 次 A 区
出川南 29 次 B 区
出川南 16 次
136
130
124
118
836
842
848
854
860
866
872
878
884
142
890
896
溝 1001
溝 1002
溝 1003
E
D
C
0
5=1/300
10m

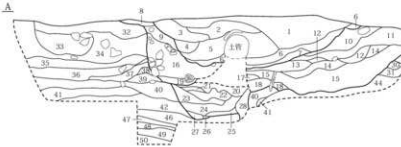
第 4 図　遺構配置図



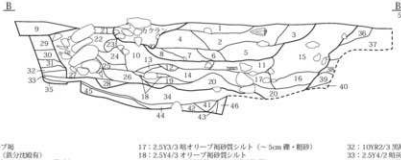
第 5 図　第 16 次調査遺構図・土層図

溝 2901





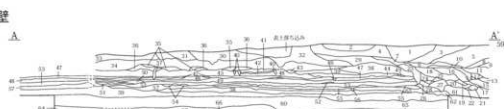
1：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（～1cm礫 微）
2：7.5Y3/2 オリーブ黒砂質シルト（～5cm礫 中）
3：2.5Y3/2 暗オリーブ褐砂質シルト
4：10YR3/4 暗褐砂質シルト（～5cm礫 多，炭化物 微）
5：10YR4/2 灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
6：5Y4/3 暗オリーブ砂質シルト（鉄分沈殿有）
7：10YR3/4 暗褐砂質シルト（黄灰粒 微）
8：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（～3cm礫 少）
9：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト
10：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（～5cm礫 少）
11：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（炭化物粒 微）
12：10YR3/3 暗褐砂質シルト（礫砕粒 微）
13：7.5Y3/2 オリーブ黒砂質（礫砕・～1cm礫・黄褐粒 微）
14：10YR3/4 暗褐砂質シルト（礫砕・黄褐粒 微）
15：10YR4/3 にぶい黄褐砂質（～3cm礫 微）
16：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（～10cm礫 大）
17：10YR4/2 にぶい黄褐砂質シルト（礫砕～1cm礫）
18：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト
19：10YR3/4 暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
20：10YR4/4 暗褐砂（礫砕）21：7.5YR3/3 暗褐砂質シルト
21：7.5YR3/3 暗褐砂質シルト
22：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿有）
23：10YR4/4 暗褐砂質シルト
24：10YR4/3 にぶい黄褐砂質
25：10YR4/4 暗褐砂質シルト（礫砕）
26：10YR1.7/1 黒砂質シルト
27：2.5Y5/4 黄褐砂礫（礫砕・28 岩ブロック）
28：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（礫砕・黄褐粒 微）
29：10YR4/4 暗褐砂質シルト（～1cm礫 微）
30：10YR3/4 暗褐砂礫（礫砕～1cm礫）
31：10YR3/3 にぶい黄褐砂質シルト（礫砕粒 微）
32：2.5Y4/3 オリーブ褐砂礫（礫砕～5cm礫）
33：10YR3/4 暗褐砂礫（礫砕～10cm礫）
34：10YR4/2 灰黄褐砂質シルト（～10cm礫 少）
35：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（～1cm礫 微）
36：10YR3/3 暗褐砂礫（礫砕～1cm礫）
37：10YR3/4 暗褐砂質シルト（礫砕シルト混）
38：10YR4/2 灰黄褐砂質シルト（～3cm礫 少）
39：7.5YR5/2 灰オリーブ褐礫（礫砕～1cm礫）
40：10YR3/4 暗褐砂質シルト（礫砕）
41：10YR3/4 暗褐砂（礫砕）
42：10YR4/6 褐砂礫（礫砕・粗砕）
43：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト
45：10YR3/4 暗褐砂質シルト
44：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト
46：10YR4/6 褐砂礫（礫砕～3cm礫）
47：2.5Y5/4 黄褐砂礫（礫～中砕）
48：2.5Y5/2 暗灰黄砂礫（礫～中砕）
49：10YR5/3 にぶい黄褐砂礫（礫～中砕）
50：2.5Y5/4 黄褐砂礫（礫砕）



1：2.5Y4/3 オリーブ褐
2：10YR4/1 灰黒土（鉄分沈殿有）
3：10YR4/4 暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
4：5Y3/2 オリーブ黒砂質シルト（～5cm礫・鉄分沈殿 少）
5：10YR3/4 暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
6：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト
7：10YR3/3（～5cm礫 少）
8：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト
9：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト（～10cm礫 少）
10：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（～5cm礫 微）
11：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（礫砕～3cm礫）
12：10YR5/4 暗褐砂質シルト
13：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（黄灰粒 微）
14：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（黄灰・褐粒 微）
15：10YR3/3 暗褐砂質シルト（～10cm礫 多）
16：10YR3/4 暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
17：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（～5cm礫・粗砕）
18：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト
19：10YR3/4 暗褐砂質シルト（黄灰粒 微）
20：10YR3/3 暗褐礫砕（礫・中砕・～3cm礫 微）
21：10YR3/4 暗褐砂質シルト（黄灰粒 微）
22：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト
23：2.5Y3/4 暗赤褐砂（礫砕・黄灰粒 微）
24：10YR4/2 灰黄褐砂質シルト（礫砕・粗砕）
25：10YR3/3 暗褐砂質シルト（礫砕粒 微）
26：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（～3cm礫・黄灰粒 微）
27：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
28：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（マンガン沈）
29：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（～3cm礫 微）
30：10YR3/4 暗褐砂質シルト（黄灰粒 微）
31：2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質シルト（炭化物粒 微）
32：10YR2/3 黒褐礫砕
33：2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト（～5cm礫 少）
34：10YR3/4 暗褐砂質シルト
35：2.5Y4/2 暗灰黄砂（礫砕・鉄分沈殿）
36：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（～1cm礫 微）
37：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト（礫砕・～3cm礫 微）
38：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト（～1cm礫 微）
39：2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト（～3cm礫 微）
40：10YR3/4 暗褐砂質シルト（黄灰粒 微）
41：礫砕（～5cm礫 大，鉄分中）
42：礫砕（～5cm礫 大，鉄分 大）
43：礫砕（～5cm礫）
44：粗砕砕（鉄分沈殿砕）
45：粗砕砕
46：2.5Y3/3 黄褐シルト質（鉄分中）

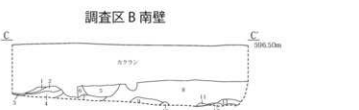
第6図　第29次調査遺構図

調査区A東壁



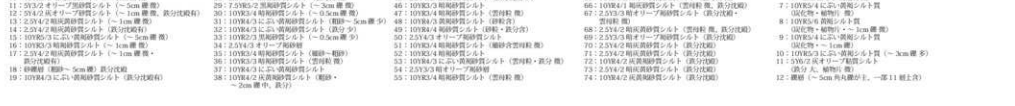
1：10YR3/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 微）
2：10YR3/3暗褐砂質シルト（～3cm礫 少）
3：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（～5cm礫 多）
4：10YR3/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 少）
5：5Y4/2灰オリーブ砂質シルト（～3cm礫 微）
6：2.5Y3/3暗オリーブ砂質シルト（鉄分沈殿有～～3cm礫 微）
7：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～1cm礫 微）
8：砂礫層（～3cm礫 多）
9：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～3cm礫 微）
10：10YR3/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 微）
11：5Y3/2オリーブ黒砂質シルト（～3cm礫 微）
12：5Y4/2灰オリーブ砂質シルト（～1cm礫 微，鉄分沈殿有）
13：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～1cm礫 微）
14：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿有）
15：10R5/3にぶい黄褐砂質シルト（～5cm礫 微）
16：10YR3/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 微）
17：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～1cm礫 微・鉄分沈殿有）
18：砂礫層（粗砂～5cm礫）鉄分沈殿
19：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
19：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
20：5Y4/1灰砂質シルト（～3cm礫 少，鉄分）
21：砂礫層（粗砂～5cm礫）
22：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（雲母粒 微）
23：2.5Y4/1黄灰砂質シルト（鉄分）
24：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（雲母粒 微）
25：2.5Y4/3オリーブ褐砂質シルト（礫層）
26：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～3cm礫 少）
27：2.5Y4/3オリーブ褐砂質シルト（鉄分）
28：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（雲母粒 微）
29：2.5Y5/2黒褐砂質シルト（～3cm礫 微）
30：10YR3/4暗褐砂質シルト（～0.5cm礫 微）
31：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（粗砂～5cm礫 少）
32：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分少）
33：10YR2/3黒褐砂質シルト（～0.5cm礫 少）
34：2.5Y4/3オリーブ褐砂質
35：10YR3/4暗褐砂質シルト（礫砂～粗砂）
36：10YR3/3暗褐砂質シルト（雲母粒 微）
37：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト
38：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（粗砂～2cm礫 中，鉄分）
38：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（粗砂～2cm礫 中，鉄分）
39：砂礫層（粗砂～1cm礫）
40：10YR4/2灰黄褐砂質シルト
41：2.5Y4/2暗灰黄褐砂質シルト
42：2.5Y4/1黄灰砂質
43：10YR5/2灰黄褐砂質シルト（鉄分）
44：10YR7/1灰白砂質シルト
45：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿 少）
45：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿 少）
46：10YR3/3暗褐砂質シルト
47：10YR3/4暗褐砂質シルト（雲母粒 微）
48：10YR4/3黄褐砂質シルト（砂粒 有）
49：10YR4/4褐砂質シルト（砂粒・鉄分多）
50：2.5Y4/3オリーブ褐砂質シルト
51：10YR3/4暗褐砂質シルト（礫砂 雲母粒 微）
52：10YR3/4暗褐砂質シルト
53：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（雲母粒・鉄分 微）
54：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質
55：10YR3/4暗褐砂質シルト（雲母粒 微）
56：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（雲母粒 微）
57：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト
58：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿）
59：2.5Y3/4暗褐砂質シルト（鉄分沈殿）
60：10YR4/2灰黄褐砂質シルト
61：10YR6/2灰黄褐砂質
62：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（礫砂）
63：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
64：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿）
65：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（雲母粒 微）
66：10YR4/1暗灰褐砂質シルト（雲母粒 微，鉄分沈殿）
67：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿・雲母粒 微）
68：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（雲母粒 微，鉄分沈殿）
69：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿）
70：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
71：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
72：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
73：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
74：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）

調査区B南壁



調査区B南壁
1：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（～1cm礫 微）
2：10YR3/4暗褐砂質シルト（～2cm礫 多）
3：2.5Y3/3暗オリーブ褐シルト質
4：10YR4/4褐シルト質
5：10YR4/6褐シルト質（鉄分多，～2cm礫・植物片 少，炭化物 微）
6：10YR4/3にぶい黄褐シルト質（～2cm礫 少，炭化物 微）
7：10YR5/4にぶい黄褐シルト質（炭化物・植物片 微）
8：10YR5/6黄褐シルト質（炭化物・植物片 ～3cm礫 微）
9：10YR5/4にぶい黄褐シルト質（炭化物～1cm礫）
10：10YR5/3にぶい黄褐シルト質（～5cm礫 多）
11：5Y6/2灰オリーブ粘質シルト（鉄分大，植物片 微）
12：礫層（～5cm角丸礫が主，～第11層上面）

調査区A南壁



1：10YR3/4暗褐砂質シルト（～3cm礫 微）
2：2.5Y4/4オリーブ褐砂質シルト（～3cm礫 少）
3：10YR3/4暗褐砂質シルト（～3cm礫 微）
4：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～3礫 微）
5：10YR3/3暗褐砂質シルト（～3cm礫 微）
6：10YR2/2黒褐土（炭化物 微）
7：2.5Y4/1黄灰土（鉄分沈殿有）
8：5Y4/2灰オリーブ砂質シルト（～5cm礫 少）
9：5Y4/3粘オリーブ砂質シルト（～5cm礫 微，鉄分沈殿有）
10：2.5Y6/2灰黄砂質シルト（～5cm礫 微，粗砂含）
11：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（～5cm礫 中）
12：2.5Y4/3オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
13：5Y5/2灰オリーブ砂質シルト（～10cm礫 多）
14：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～10cm礫 中）
15：7.5YR5/2灰褐砂質シルト質（～10cm礫 中）
16：2.5Y5/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿有）
17：2.5Y3/3オリーブ褐砂質シルト（～10cm礫 微）
18：砂礫層（～5cm礫・粗砂含）
19：2.5Y4/3オリーブ褐礫砂
20：10YR5/3にぶい黄褐砂
21：10YR5/2灰黄褐砂質シルト（～2cm礫 多）
22：10YR6/6黄褐礫砂
23：10YR5/2灰黄褐礫砂
24：10YR6/2灰黄褐砂質シルト（礫砂 微）
25：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（～3cm礫 多）
26：10YR5/4にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
27：10YR5/2灰黄褐砂質シルト（～1cm礫 少）
28：10YR5/4にぶい黄褐砂
29：10YR5/3にぶい黄褐砂
30：10YR5/2灰黄褐礫砂（～1cm礫 多）
31：2.5Y4/4オリーブ褐砂質シルト（～1cm礫・粗砂 少）
32：10YR4/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 多）
33：10YR3/3暗褐砂質シルト（～1cm礫 微）
34：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（～1cm礫 多）
35：10YR3/4暗褐砂質シルト（～1cm礫 微，鉄分沈殿有）
36：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト
37：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（～3cm礫 多）
38：砂礫層（～10cm礫）
39：10YR3/3暗褐砂質
40：10YR5/4暗褐砂質シルト（～1cm礫 少）
41：10YR4/4暗褐砂質シルト（粗砂混質シルトブロック含）
42：10YR5/3暗褐砂礫層（礫層～5cm礫）
43：2.5Y6/3明褐砂礫層（粗砂～3cm礫）
44：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（～10cm礫 大）
45：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（雲母粒 微）
46：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト
47：10YR4/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
48：10YR2/3黒褐砂質シルト
49：10YR3/3暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
50：10YR3/3暗褐砂質シルト（～5cm礫 少）
51：10YR4/4褐砂質シルト（～1cm礫 微）
52：10YR4/2灰黄褐砂質シルト（～3cm礫 微）
53：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト
54：10YR4/4褐砂質シルト（～3cm礫 中，～1cm礫 微）
55：7.5YR4/3褐礫砂（～3cm礫 多）
56：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
57：10YR4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
58：10YR4/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
59：10YR4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
60：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
61：10YR5/2灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
62：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
63：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
64：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿）
65：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
66：10YR4/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿）
67：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿）
68：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿）
69：10YR3/4にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
70：2.5Y4/2暗灰黄砂質シルト（鉄分沈殿）
71：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿）
72：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
73：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
74：10YR4/2暗灰黄褐砂質シルト（鉄分沈殿）
75：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
76：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
77：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
78：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
79：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
80：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
81：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
82：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
83：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
84：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
85：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
86：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
87：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
88：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
89：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
90：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
91：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
92：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
93：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
94：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
95：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
96：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
97：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
98：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
99：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
100：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
101：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
102：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
103：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
104：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
105：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
106：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
107：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
108：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
109：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
110：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
111：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
112：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
113：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
114：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
115：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
116：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
117：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
118：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
119：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
120：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
121：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
122：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
123：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
124：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
125：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
126：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
127：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
128：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
129：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
130：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
131：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
132：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
133：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
134：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
135：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
136：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
137：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
138：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
139：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
140：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
141：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
142：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
143：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
144：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
145：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
146：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
147：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
148：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
149：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
150：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
151：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
152：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
153：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
154：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
155：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
156：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
157：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
158：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
159：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
160：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
161：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
162：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
163：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
164：10YR3/3暗褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
165：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
166：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
167：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
168：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
169：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
170：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
171：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
172：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
173：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
174：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
175：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
176：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
177：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
178：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
179：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
180：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
181：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
182：2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
183：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
184：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
185：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
186：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
187：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
188：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
189：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
190：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
191：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
192：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
193：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
194：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
195：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
196：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
197：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
198：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
199：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
200：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
201：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
202：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
203：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
204：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
205：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
206：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
207：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
208：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
209：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
210：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
211：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
212：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
213：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
214：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
215：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
216：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
217：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
218：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
219：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
220：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
221：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
222：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
223：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
224：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
225：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
226：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
227：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
228：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
229：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
230：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
231：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
232：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
233：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
234：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
235：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
236：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
237：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
238：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
239：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
240：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
241：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
242：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
243：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
244：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
245：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
246：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
247：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
248：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
249：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
250：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
251：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
252：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
253：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
254：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
255：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
256：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
257：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
258：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
259：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
260：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
261：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
262：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
263：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
264：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
265：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
266：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
267：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
268：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
269：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
270：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
271：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
272：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
273：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）
274：10YR5/3にぶい黄褐砂質シルト（鉄分沈殿有）

第３節　遺物

１　第16次調査

試掘調査で土師器甕片がまとまって出土したが、本調査では土師器甕とみられる小片が砂礫層中から５点出土しているのみである。いずれも摩耗が激しく、図化できるものはないが、時期については古墳時代後期のものが主体を占めるため、西側に隣接する第４次調査との関係が想定される。

２　第29次調査

⑴　中世以前の遺物

Ａ区、Ｂ区合わせて32点の土器・陶磁器片が出土した。古墳時代から中世までのものであるがいずれも小破片であり、図化できるものはなかった。また遺構に伴うものはなく、Ａ区南小区西端部の流路内砂礫層を中心に出土した。多くは７世紀代の古墳時代後期と９世紀中頃の平安時代前期のものである。器種としては須恵器大甕・甕などの貯蔵具が多く、土師器・須恵器の杯・椀といった食膳具も若干みられた。古墳時代の土器については、第16次調査と同様北西に隣接する第４次調査や、南に隣接する第２次調査との関連が、平安時代の土器については本調査区の南西方向にある当該期の集落との関係が考えられる。中世の遺物として白磁の碗・四耳壺の小片が各１点出土した。詳細はわからないが、中世の遺構は線路東側の第27次調査などで見つかっている。

⑵　近世～近代の遺物（Ａ区出土）

近代整地層、溝2901を中心に出土した。溝の廃絶に際して投棄されたものとみられる。そのほか表土、排土の中からも若干の出土があったが、これらは現代に属する可能性もある。

ア　陶磁器

いずれも破片であり、茶碗、皿、急須など多岐にわたる食器類が主体を占める。蕎麦猪口、茶碗など、一部に江戸時代後半～幕末期とみられるものもあったが、ほとんどが近代に属すると考える。

イ　土製品

ミニチュア下駄が４点出土した。いずれも長さ２㎝ほどの小品で、すべて表採・排土中のものである。詳細はわからないが玩具等として使われたものとみられる。

ウ　ガラス製品

溝2901から「みや古染」ガラス小瓶が１点出土した。気泡を含み、ロゴが右横書きであることから戦前の染粉瓶と思われる。製造元の桂屋ファイングッズ株式会社に確認したが、震災や戦災などのため古い資料が残っておらず、詳細は不明であるとの回答があった。

⑶　現代（昭和30～40年代）の遺物（Ｂ区出土）

ア　ガラス製品

牛乳瓶が２点出土した。ロゴ表示などから、いずれも名糖牛乳の容量180cc瓶であったので、製造元の協同乳業株式会社に確認をして回答を得た。１点は胴部に赤文字のロゴ表示（ＮＳ＝名古屋精糖・名糖牛乳）があり、底面に日本硝子製を表す刻印、胴部下端に㊀180ccの刻印があるもので、昭和31～39年製造の牛乳瓶である。もう１点は断面が八角形のもので、ロゴ表示は薄くなっているが、胴部の名糖、肩部の「Meito Homo Vita Milk」と丸囲み牛マークが読み取れることから、昭和39～49年製造の名糖ホモビタ牛乳の瓶である。両者の存在時期から埋没時期は昭和39年頃である可能性がある。

イ　その他

即席ラーメン（表面に明星ラーメンスープ付と記載）包装袋（合成樹脂製）が１点みられた。製造元の明星食品株式会社に確認したところ、昭和37年６月発売の「スープ付　明星ラーメン」の袋と思われるとの回答を得た。埋没時期はそれ以降となる。

第４章　総括

第１節　遺跡の「空白地帯」

これまで28回を数える本遺跡の調査で、出川南遺跡は弥生時代から古代にかけての大規模な集落跡であることがわかってきたが、今回の調査地では当該時代の遺構・遺物の少なさが浮き彫りになった。調査地北西側隣接地の第４次調査では古墳時代後期を中心とした100軒を超える竪穴住居址や中期古墳（平田里古墳群）が見つかっており、また調査地の東側（篠ノ井線線路東側）での第23次調査では、史跡弘法山古墳と同時期古墳時代前期初頭の集落が見つかっている。それに対して今回の調査では、本遺跡の主たる時代にかかる遺構は皆無であり、当該期の遺物も小破片が40点程度であるなど、人の生活痕跡は確認できなかった。つまり今回の調査地は、濃密に遺構が広がる本遺跡の中で、いわば集落の空白地帯といえる。

遺構が存在しない理由は、大規模な流路の存在であろう。29次調査ではＡ区の大半が、概ね南西から北東に流れたと考えられる大規模な流路の砂礫堆積の範囲内であることを確認した。規模は全く不明で、東側の立ち上がりはＡ区東小区で確認できるものの、その西側一帯では砂礫層と暗褐色系砂質シルトを含む土層が交互に重なるため、恒常的に砂礫を押し流す流れではなかったと考えられるが、東下がりの緩い傾斜堆積であるため、そこに集落が展開することはなかったと考えられる。西縁についてはＢ区を設定して調査を行ったが、地表下150㎝まで撹乱が及んでおり、その中での確認はできなかったため、この流路全体としての幅を捉えることはできなかった。この流路に堆積した砂礫のうち下層のものについて、地質の専門である信州大学特任教授大塚勉氏に現地で確認してもらったところ、奈良井川系統の礫が主体となるとの見解であった。第４次調査でも、調査区を南から北に流れる溝が何条か検出され、時期差はあるもののいずれも奈良井川系統の流路跡と考えられている。今回の調査で検出された大規模流路からは、わずかではあるが古代の土器片が出土していることから、第４次調査で検出した第４号溝址と同時期（古墳～平安）である可能性がある。今回検出した大規模流路が本流的なもので、その左岸にある第４次調査地へオーバーフロー的に流れたのがそれだと考えれば、つながってくる可能性はある。

県埋文センターで実施した第28次調査では、29次Ａ区で確認した砂礫層の東端から約100m東にあたる位置において、南北方向に流れる流路跡を検出している。この流路は、出土した遺物の年代分析により、６～７世紀には存在していたことが明らかになっている。穴田川の旧流路である可能性を考えているが、今回確認された流路の方向とは若干異なるので、田川系統であるかもしれない。

また、29次Ａ区東で見つかった溝2901の東側では非常に安定した土層の堆積を確認した。当初ここで複数の生活面を想定したが、大塚氏の分析によると、これは非常に緩やかな流れによる湿地性堆積の結果であり、水が流れている時期とある程度の植物が繁茂する時代が交互に訪れたことを示すものであるという。この一帯は松本盆地でも標高の低い箇所であるため、押し出してきた奈良井川の流れが停滞する地帯であったと考えられる。そして時折洪水性の流れが発生して、その厚い精緻な湿地性堆積土層を削ったということになろう。そのためこの一帯は古代以降生活の場所ではなくなり、遺跡の「空白地帯」になったと考えられる。

現在までに行われた本遺跡及び周辺の遺跡の調査結果から、平安時代後期以降奈良井川からの流れ込みが途絶えたと考えられており、その結果この一帯では集落は希薄になっていったとみられている。中世以降、特に近世以降になると、東からの牛伏川や田川の氾濫が頻発するようになり、北の出川西遺跡などでも牛伏川或いは田川とみられる氾濫痕跡が確認されるようになる。第16次調査でも中世から近世にかけてとみられる砂礫層の堆積を確認しており、これは調査時に行われた専門家の分析により、田川系統と考えられている。いずれにせよ、この一帯は人の生活には適さない場所となったといえる。

第２節　見つかった近代の水路跡（穴田川旧流路）

１　見つかった水路跡

29次調査で確認された溝2901が掘り込まれていたのは現代整地層・撹乱の下であり、遺物はほぼすべてが近世～近代の陶磁器片で、近代昭和戦前期に廃絶した河川跡とみられる。これは明治43年陸地測量部地形図「松本」に記されている穴田川の位置とほぼ合致している。

２　穴田川の概要

穴田川の源流は松本市市場367番地90付近である。現在の流路はそこから北流して芳川平田地籍で篠ノ井線東側に流れ、平田東１丁目の市道5109号線沿いを経て再び篠ノ井線西側に渡ったところで暗渠化している。その先は芳野、双葉地籍の東端を篠ノ井線、市道5508号線・県道289号線に沿って北流し、市道5505号線（やまびこ道路）のやまびこ地下道西交差点の西側で多くの湧水を得て顕在化するとさらに北上し、井川城址の横を流れてその守りを固めている。さらにその北方に流れて、渚１丁目所在の渚城址を囲む川或いは水堀に流れ込む水路となっていた可能性もある。現在は渚城址の東側で田川に注いでいる全長約4.6㎞の普通河川である。最上流部より上流は、奈良井川から引水している四ヶ堰が接続しており、戦後米軍によって撮影された空中写真（以下「米軍写真」という）でも確認することができる。穴田川と四ヶ堰の境を米軍写真で確認すると、現在最上流部としている部分とほぼ同位置で、人工の直線的な四ヶ堰が、細かく蛇行しながら流れる穴田川に接続しているのが見て取れる。

３　四ヶ堰の概要（堰（ぜき）：長野県などの言葉で用水路を指す）

四ヶ堰とは、明治４～５年（1871 ～ 72）に築造された用水路で、旧芳川村の四か村（村井町・小屋・野溝・平田）を潤していたためその名がある。昭和47年（1972）に松本市芳川土地改良区（平成13年（2001）松本市笹賀土地改良区と合併し現松本市奈良井川土地改良区）が編纂した『四ヶ堰百年の沿革』（以下『沿革』という）によれば、その前身となる堰（四ヶ村堰）は江戸時代中期の享保15年（1730）にはすでに存在し、組合を作って管理していたことが、当時の平田村名主百瀬三七所蔵の文書の中にあったとしている。

この用水路は、塩尻市広丘堅石地籍の奈良井川右岸で七ヶ堰として取入れ、途中奈良井川左岸の神戸・神戸新田・二子の三か村分（三区堰）を分岐して四ヶ堰となって北上し、塩尻市広丘吉田の分水施設（現円筒分水）で小屋堰・村井堰・幅下堰・二区堰（平田・野溝）に分水する。二区堰は途中さらに野溝堰、排水路（現芳川第一雨水幹線）を分水してそのうちのひとつの平田堰として北上し、松本市名勝百瀬家庭園（百瀬三七旧宅）東側を経て前項の場所から穴田川となる（第８図、第９図参照）。

『沿革』によれば、四ヶ堰の前身である堰は簡易な構造であり、奈良井川の氾濫等によって壊される被害がたびたび発生したという。決定的だったのが慶応４年（明治元年：1868）の長雨による大洪水で、それにより堰路が完全に破壊され、水田耕作が著しく困難になったことから、百瀬三七はその解決のため自ら測量をして新堰のルート決定したものだという。当初こそ周辺の村からの反対も受けたが、三七の熱心な説得もあり、最終的には松本藩（松本県）の補助などを得て完成させたとされている。取水口は現在も同じ塩尻市広丘堅石で、途中段丘上を深掘り区間とした。なお現在深掘り部分の一部は暗渠化され、塩尻市北部公園では一部情景再現されている。さらに北上し、広丘吉田地籍で４つに分水して各村へ引水した。それぞれの流末は田川などに排水していた。堅石取水口から穴田川接続部までの長さは約7.4㎞を測る。

堰の構造は、当初は素掘りの溝であったと考えられる。水路の断面構造にはいくつかの種類があるが、最も原初的なものが両岸土羽（ど は）（土坡工）の水路で、これが土水路である。そこに護岸としての石積み、遺漏防止としてのコンクリート擁壁を施した水路などがある。『沿革』によれば、堰自体は「土水路」と記されている。コンクリート化は分水施設の改修が最初であり、現在も塩尻市広丘吉田にある円筒分水は、伊那の西天竜耕地整理組合（現西天竜土地改良区）によって大正11年（1921）から順次造られ始めていた穂坂式分水場（西天

竜幹線水路円筒分水工群として現役　平成18年（2006）土木学会選奨土木遺産認定）を手本として昭和9年（1934）に設置されたものの二代目（昭和60年改修）である。写真図版10-6の古写真では、円筒分水の奥（上流）にある土水路を確認することができる。水路自体のコンクリート化は戦後になってからで、昭和24年以降上流から順次整備されていった。今回確認した溝址は基本的に素掘りで、西岸のみ底部に胴木・石積みが施されたものである。この溝は当初は土水路であったが、西岸が砂礫層であるため崩落防止措置として設置したと考えるのが自然である。改修の時期は不明だが、石積みの下部で確認された木組み遺構が鉄製ボルト止めであったため、開削工事が行われた明治４年（1871）ごろとは考えられないので、当初整備が行われた後、昭和戦前期に付け替え廃絶されるまでの間に施されたのだろう。いずれにしても、平田堰については流末に近いこともあり、『沿革』編纂の段階でも史料がほとんどなく、わからない点が多いとしている。

4　溝址の正体

以上のことから、今回確認された溝址が四ヶ堰のうち平田堰の流末部である穴田川の旧流路であると考えた。この一帯が明治以降松本村と芳川村の村境（調査地は旧芳川村（旧平田村））であったことからみても、四ヶ堰開削に伴って接続する穴田川も整備していると考えられ、胴木のある石積みなども水路の補修作業に伴うものであった可能性はある。今回その構造の一部を明らかにすることができたといえよう。

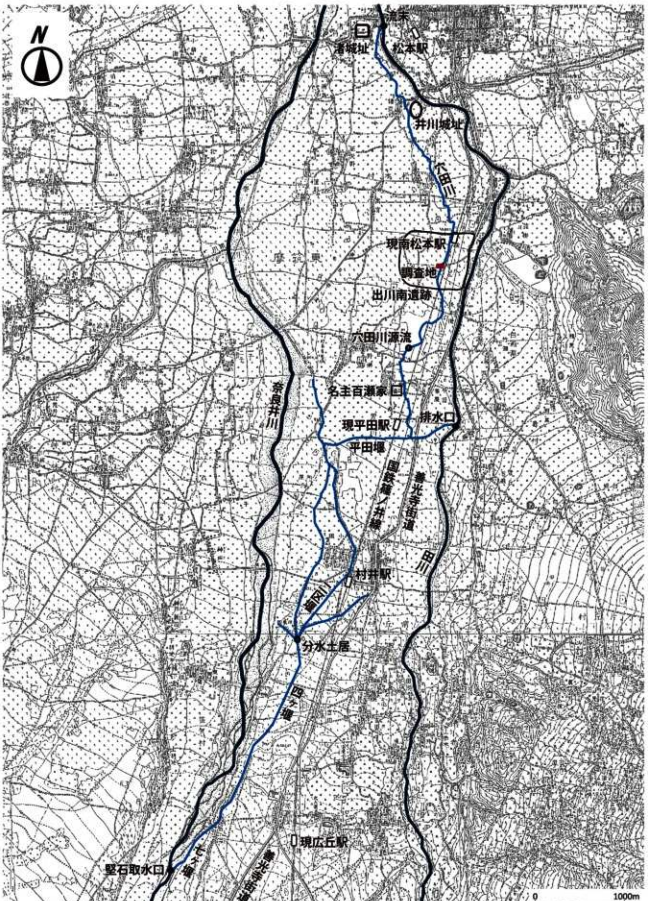
また今回整理を進める中で、過去の調査でもその痕跡は見つかっていた可能性があることがわかった。平成25年度実施の出川西遺跡第10次調査では、調査区の西寄り部分に南北方向の細長い撹乱があり、写真で見る限り検出状況は溝2901のものと酷似しているが、同調査では撹乱として取り扱っているので詳細は不明である。しかし同調査の図面などを確認したところ、①幅も２～３ｍ前後で溝2901と同規模の溝状である。②出土物も溝2901同様プラスチックなどいわゆる現代のものはなかった、という点から、これが穴田川の下流であった可能性がある。さらにその撹乱に並行する１溝からは天保通宝（天保６年＝1835初鋳）が出土していることから近世幕末期以降の遺構と考えられるので、この溝も溝2901と関連する可能性がある。ちなみに米軍写真によれば、この付近での穴田川の流路は昭和23年段階で現在の暗渠と同じ（約80ｍ東）である。つまりこの撹乱（溝）も、溝2901と同様、昭和戦前期に工業用地造成に合わせて整備（埋め戻し・移設）されたものと考えられる。

5　成果と課題

今回確認した溝2901は、本来ならば上記と同様に近代以降の遺構であるため調査対象外ではあったが、現在の穴田川との関連を確認するため調査を実施した。その結果として、現在の穴田川の前段階であると判断したが、わからない点も残っている。この溝の開削から廃絶までが近代であることは間違いないが、これがもともとここを流れていた穴田川を四ヶ堰掘削に合わせて改修したものか、それとも流末として新たに掘削した水路であるのかという点である。ひとつのトレンチの土層では二時期の流路の可能性（当初穴田川と改修後の流路）を想定したが、その他の部分では確認できなかった。また地元の芳川歴史研究会会長村田正幸氏から、これが「ジアンド堰」ではないかとの指摘も受けたが、明らかにはできなかった。

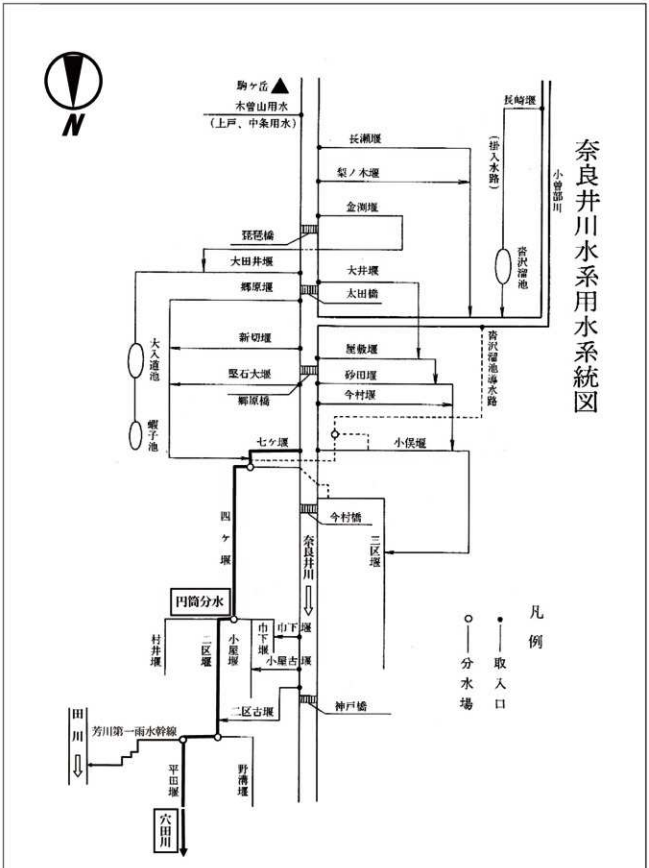
もう一点、調査開始当初砂礫層主体の自然流路を穴田川旧流路であると仮定していたが、それは明らかにできなかった。ただ、いずれにしても、この地域一帯は前述のように奈良井川の氾濫によって形成された扇端部であることからみると、奈良井川に由来する流路と考えてよいのではないかと考える。

この周辺の開発は近代昭和戦前期の工業団地に始まり、戦後になり宅地化などが進んだ地域であるが、近代初頭には水路や暗渠を整備した人々の生活の営みがあったことが少しずつわかってきた。また戦後から数えてもわずか80年ほどであり、それほど古い時代でもないと思われるが、目まぐるしい変化の中で、確認できなくなったものが多いことも改めて認識することとなった。



※　明治43年測量大正２年発行　陸軍陸地測量部地形図松本・塩尻 (1/25000) に加筆したもの

第８図　四ヶ堰・穴田川流域図（明治期）



※　松本市芳川土地改良区『四ヶ堰百年の沿革』掲載図に一部加筆したもの（下記のとおり）
　　奈良井川（名称・矢印）、田川（位置・名称・矢印）、穴田川（名称・矢印）、芳川第一雨水幹線（名称・分岐・矢印）
　　円筒分水（名称）、方位記号を加筆
　　七ヶ堰・四ヶ堰・二区堰・平田堰を太線に変更

第９図　奈良井川水系用水系統図

第３節　南松本地域における近代の開発とその展開

本節では、出川南遺跡第29次発掘調査で確認された溝址が近代に属すると想定されることから、出川南遺跡一帯、現在の南松本地域の近代における開発と関連する情勢について考察し、その様相を概観したい。

前提として、近世の出川南遺跡一帯は出川組や高出組に属したものと想定される。また、周辺では、寛永年間に出川町と呼ばれるようになる北国脇往還に沿った地域が発達したことが知られる。その中で、出川南遺跡一帯は出川町に近接する農地であったと推察して良いだろう。明治44年（1911）発行の「二万五千分一地形図　松本近傍八号　仮製版」を見ると、南松本地域を示す松本村の一帯は現在の出川町、井川城、高宮周辺に集落域が限られ、他は水田と桑畑が広く分布したことがわかる。そして、現在のやまびこ道路を境にして、かつては概ね北が水田、南が桑園となっていた。桑園は現在の笹部、平田地区まで広く分布し、この傾向は昭和10年（1935）発行の「松本市全図　附本郷村浅間付近」並びに「松本市観光地図」でも同じである。『長野県町村誌』南信編を参照すると、出川南遺跡一帯が属したとみられる信楽村について、明治９年(1876)年に筑摩県に報告された「地味」の記載では「其色赤黒くして、其質概して美なり。早稲（わせ）、粱（あわ）麦に宜し。桑、藍（あい）、甘藷（かんしょ）（サツマイモ）、大根、牛房（ごぼう）、胡蘿蔔（こらんだい）（ニンジン）等に少しく適す。水利甚だ不便なり、時々旱（ひでり）に苦しむ」（東筑摩郡82ページ）と記載されていて、さらに「物産」の記載には、米、大小麦、粱、大豆、蘿蔔（すずしろ・らふく）（ダイコン）、菜、牛房、胡蘿蔔、小豆、大角豆（ささげ）、葱（ねぎ）、甘藷、里芋、蕗（ふき）の他、生糸、蚕卵紙（さんらんし）、繭（まゆ）、清酒等が記載されている（前掲84ページ）。米・清酒については、「近隣へ輸送す」と付記されているから、自村内で供給余剰があり、相当の収穫高があったことがわかる。また、蔬菜類に加え、この明治初期の段階で、桑の栽培、繭・生糸・蚕卵紙について記載があり、養蚕に関わる生産が営まれたようだ。ただ女性の仕事に関して、養蚕を営むのが59人と記載され、信楽村の女性の総数は1,310人とあり、従事者は5%以下に留まっていたようで、出川南遺跡一帯の養蚕関連の生産はこの後、明治後期にかけて普及したものと推察される。

なお、水田と桑園がある程度分化されていたことは重要で、後述する工業地帯の発展に関わる。前述のやまびこ道路北地点は、現在も湧水が豊富で、利水に恵まれたとみられるが、出川南遺跡一帯を含むやまびこ道路南地点は、さほど湧水が豊富ではなかったと想定され、加えて遠い奈良井川からの引水は困難であった。さらに、東に田川が流れるが、前掲『長野県町村誌』の記載には「常歳枯涸す」（前掲83ページ）とある。松本市域の田川流域では、夏季にこの川が枯川となることが知られ、近年もこの現象が起こっている。つまり、水利に恵まれていたとされる南松本地域の中で、出川南遺跡一帯は、少なくとも近代において利水に比較的難があり、そこに広く桑園地帯が生じる要因があった。このことから、本件調査で確認された溝址は、灌漑を意図したとは考えづらく、四ヶ堰の余水と雨水等を流下させたものとみるべきであろう。

さて、長野県下における製糸業・養蚕業は、大正時代に最盛期となる。県下経済の７割を養蚕関連が占め、耕地に占める桑園の割合は３割に至り、関連工場数も大正８年（1919）に最多となった。松本地域は、概ね諏訪・須坂・丸子に次ぐ製糸生産規模があり、明治23年(1890)に開業した片倉製糸松本製糸場が発展した他、大正８年には県繊維工業試験場が開設され、製糸業・養蚕業の拠点となった。そのような中で、出川南遺跡一帯は、松本市街地に近接する広大な桑園供用地として、製糸業・養蚕業を支える地域であったと想定される。ところが、昭和初期になると製糸業・養蚕業を取り巻く環境は一変する。昭和２年（1927）の金融恐慌、さらには、昭和５年の昭和恐慌の影響を受け、製糸業・養蚕業は壊滅的な不況期に没入する。繭の価格は一挙に３分の１以下に下落したといわれ、農家は負債を抱え、納税滞納のほか、失業者が増加し、学校に弁当を持参できない児童の存在等が問題化した。また、税収激減により、自治体財政は逼迫して、公共事業延期や市・学校職員等の給与削減や不払いといった事態も起こる。こうした中で、養蚕偏重に対する批判が起こり、県下では、生産転換について議論された。米麦、蔬菜、果樹栽培等への作変えが奨励され、桑園は合理化・整理の対象となった。また、製糸業・養蚕業の不振によって生じた失業者のため、国・県は道路等土木事業を

起こして、救済を図った。以上の昭和初期における製糸業・養蚕業の急速な衰退は、製糸業関連の遊休工場の出現、失業者の増加、桑園の整理といった諸課題を生じさせ、県下は産業に関して、広範な空白地帯といえる様相を呈することとなる。この段階で、期待された政策の一つが工場誘致であった。すでに、満州事変勃発等に刺激され、昭和６年(1931)以降、日本の工業生産、とりわけ重化学工業は躍進していた。なかでも、兵器生産を民間に依存しはじめた軍需の比重は大きくなっていた。昭和12年には、盧溝橋事件の勃発により、軍需動員に関連する法整備がなされ、軍需製品の民間依存が一段と増し、県は工場誘致について委員会を設置して、本格的な議論がなされた。工場誘致に際して、論じられた長野県の優位性は水力発電による廉価な電力供給、製糸業・養蚕業の衰退により生じた失業者等労働力提供、標高の高い山脈に囲まれ対空防御力に優れる等の要件であった。さらにこの時期、製糸業・養蚕業の衰退により遊休工場や桑園地帯等、転用すべき敷地が生じていたことも見逃せない。

昭和８年に日本電気工業(昭和電工)が大町・塩尻で操業して以来、高千穂光学(８年・諏訪)、日本無線(９年・長野)、石川島芝浦タービン(11年・辰野)等が県下で操業した。昭和15年に発行された「松本市全図　附本郷村浅間附近」には現在の南松本駅北西一帯に「ステンレス松本工場」の記載がみられ、長方形の建物が並ぶ工場が桑園の中に図示されている。図中で比較すると工場は、現在の松本城公園と同程度以上の広さであったとみられる。これは昭和12年に操業したとされる日本ステンレス松本工場である。さらに昭和22年の「松本市街図」には「日本ステンレス松本工場」、その南側近接地に「宮田製作所松本工場」、その西側近接地に「石川島芝浦タービン松本工場」の記載がみられる。出川南遺跡一帯を含む南松本地域は日米開戦を経て、工業地帯に転化したのである。なお、石川島芝浦タービンは、昭和18年に操業したとされる。これらの工場は「疎開工場」とも呼ばれ、先行研究等では、昭和17年の米軍機の本土空襲に伴い、軍需工場の分散計画が本格化したことが指摘されている。これらがどのように操業し、何を製造していたのか明らかでないが、戦闘機等兵器の金属部品、電気機械類、内燃機、車輪関連等の製造が推測されている。南松本地域の他に富士電機や三菱重工が日米開戦後に現在の松本市域で操業した。

昭和18年３月の衆議院建議委員会では新潟県選出議員が長野県に言及しており、そこでは松本において「日本ステンレス松本工場」の他に２つの工場開設が決定し、長野県は従来製糸業が盛んで、他の工業は立ち遅れていたが、時局に相応して工場が次々と建設され、この地方の開発が国家的に重大な使命を有している旨が述べられた。これは同時代において、長野県の工業化、また軍需産業拠点化が広く知られていた可能性を示し、松本地域が重要な工業地帯であると認識されたことをうかがわせる。議員のいう「日本ステンレス松本工場」の他２つの工場は、「石川島芝浦タービン」と「宮田製作所松本工場」を示すのか定かでないが、前述の富士電機の松本における操業開始が昭和17年、三菱重工の松本製作所新設が昭和20年とされる。いずれにしても、日米開戦後に３社の大規模工場が操業した南松本地域は、工業地帯の様相が色濃くなった。時はさかのぼるが、大正13年(1924)の松本市・松本村の合併「申請書」において、松本村の工業地帯としての有望性が指摘されている。趣旨は、両市村が歴史的・地理的・経済的に密接に関係し、松本村は平坦地で水利の便があり、工場地帯とするには最適であるということであった。市街地に近接して平坦であることは早くから着目されていたようである。なお、水利の便とは湧水の豊富な北部を指しているのだろうか。

以上述べてきた大規模工場誘致・操業は戦後の南松本地域開発の足掛かりになった。近代の出川南遺跡一帯は平坦でありながら、利水性の課題があり、そのことは広範な桑園地帯を現出させ、松本地域の製糸業・養蚕業の基盤を築くに至った。ところが、昭和初期に、製糸業・養蚕業の衰退が契機となり、工場誘致が計画され、軍需生産を中心とした工業地帯へ移行していく。近代における出川南遺跡一帯は経済的、政策的な動向に影響を受け、変遷した地域であったといえよう。こうした近代の変遷は、現在の南松本地域の形成に大きく寄与した。

第４節　高度経済成長期の「遺物」

今回の調査でＢ区から出土した牛乳瓶や即席ラーメンの袋は、前述のとおり昭和30 ～ 40年代（1955 ～ 1974）に属するものと考えられる。ここでは、この一帯の、その前後の時代について少し触れる。

ここには芳川地区の水田を潤してきた四ヶ堰の流末である穴田川が流れていたと考えられる。明治～大正期の地形図をみると、一帯には桑畑と穴田川が記されているのみである。その理由としては、今回を含めて現在までに行われてきた発掘調査でも明らかになったとおり、この一帯には奈良井川に由来する砂礫層が厚く堆積しているため水はけがよく、水田耕作には向かなかったため畑地となり、特に明治時代以降は、主要産業となった製糸業・養蚕業に伴う桑園として利用されてきたことが指摘できる。

この一帯が開発されるようになったのは昭和12年（1937）以降とみられる。詳細については前節で述べたとおり、具体的な工業用地化に関しては不明な点が多い。しかし昭和22年前後に撮影された米軍写真には、現在まで残る工業用地造成に伴う区画道路や、工場らしき建物群を確認することができ、また昭和18年に開業した国鉄（現ＪＲ）篠ノ井線南松本駅も確認できる。前節のとおり昭和22年の「松本市街図」には「宮田製作所松本工場」等と記載されているので、戦前・戦中に建設された工場とみられる建物群がその時点では存続している。同26・28年の「松本市全図」には自衛隊の前組織である警察予備隊、保安隊とそれぞれ記され、やがて自衛隊の用地となり、昭和30年頃の「松本市街図」では高宮西に移転済みになっている。やがて跡地の一部には市営住宅（芳野町団地）・県営住宅（南松本団地）が建設されると、その周囲にも一戸建て住宅が建ち始め、現在まで続いている住宅街の風景が広がるようになってきた。なお、昭和29年に芳川村と松本市は合併した（第29次調査地は旧松本市域と旧芳川村域の境界にあたる。現市道5601号線付近が概ね市村境であったとみられる）。昭和38年には国道19号線松本バイパス（現国道19号線）が開通し、宮田前踏切から国道へと続く道路も順次整備された。またこの前後に、現在の松本総合社会福祉センターの一帯に南部球場が造られた。第16次調査で厚く堆積した整地土は、このグラウンド造成によるものとみられる。

踏切から西に延びる道路（松本市都市計画道路出川双葉線（松本市道5601号線））の道筋は、終戦直後と現在では少し異なっている。その様子は写真図版11・12の米軍写真など空中写真４枚「空中写真に見る調査区周辺の変遷　①～④」で紹介しているが、道路の変化の経緯について簡単に触れると、①：終戦直後は工業用地造成に伴う直線的な区画道路。②：昭和30年代に建設された南西にある市営・県営住宅への進入路として付け替えられ、宮田前踏切を西に渡ると左に少しカーブした道。③：昭和38年開通の国道19号線バイパスに接続させるためにその道を西に延伸中、しかしこの段階では国道手前は未接続。④：昭和44年までには国道バイパスに接続、現在に至る。と変化の様子をたどることができる。終戦後からわずか20年ほどの間に道筋が大きく変わっていった様子がわかる。そして現在では当初の道は面影も残っていない。

Ｂ区から出土した「遺物」は昭和30 ～ 40年代を中心とするものであり、詳細な年代は昭和39年（1964）前後と思われるので、上記③の段階、つまり道路の様子が大きく変わっていく段階で紛れ込んだものと考えられる。特に包装袋は、現代でもそうだが通常はゴミとして処分されていたと考えられるので、何ちかの理由で埋没したとみられる。また牛乳瓶も、当時は回収され、再充填されていたので市中に残存することは少ないと思われるが、地元の人の話によれば近くに牛乳店があったとのことなので、店舗にあったものが何らかの理由で埋没した可能性がある。ちなみに名糖牛乳（協同乳業株式会社）の拠点工場は、かつて南松本駅の北西にあった松本工場であり、昭和50年頃の敷地内には山のように牛乳瓶の箱が積まれている光景があったので、今回出土した名糖牛乳の瓶は、本来はそこに戻されるはずのものであったと推察される。ここも平成24年（2012）に閉鎖され、出川西遺跡第10次発掘調査実施後、現在は大型店舗敷地となっている。

これらの遺物は偶然残ったものかもしれないが、高度経済成長期に変わりゆく街並みの中で、ここで暮らしていた人たちの生活の「証し」といえるのではないだろうか。

第５節　出川南遺跡の礫組成からみた奈良井川の影響

出川南遺跡において、発掘断面の地質学的な観察と、砂礫層に含まれる礫の特徴について検討した。

１　発掘断面の地質学的な観察結果

出川南遺跡調査区北壁では、その東側の下部に均質的な一部泥炭質のシルト層が、西側には砂礫層が露出する（第10図）。砂礫層の礫は、最大径約10cmで、形状は亜角礫ないし円礫である。両者の境界は明瞭であるが、凹凸に富んだ不規則な面をなし、時に高角となる。砂礫層には明瞭な葉理が見出されるが、シルト層との境界部付近では、砂礫層が屈曲する構造が見出される。砂礫層とシルト層の不規則でときに高角となる境界は、砂礫を供給した激しい流れが、シルト層を強く浸食したために形成されたものと考えられる。

調査区南壁では、東側および下部に均質な一部泥炭質のシルト層が存在し、西側および上部に砂礫層がシルト層を削剥して堆積している（第11図）。砂礫層の礫は最大径約10cmで、形状は亜角礫ないし円礫である。北壁と南壁の状況から堆積過程を推定すると、出川南遺跡付近には、砂礫層堆積以前は停滞水域に時間をかけて堆積した一部泥炭質のシルト層が広がっていた。後に南ないし南西方向からの強い水流によって粗粒な物質が供給され、下位のシルト層が削剥されるとともに砂礫層が堆積した。

第 10 図　調査区（A区東）北壁
小段以下の右側がシルト層、左側が砂礫層

第 11 図　調査区（A区東）南壁
右側が砂礫層、左側がシルト層

２　出川南遺跡における礫種組成と礫の供給源

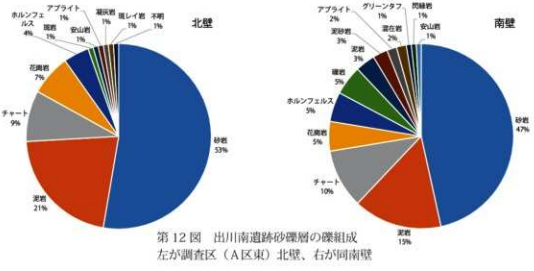
出川南遺跡に河川がどのような影響を与えたのかを知るために、調査区の北壁および南壁の礫組成について検討した。各壁面から無作為に礫を100個採集し、その礫種を肉眼で検討した（第12図）。結果は、北壁と南壁で同様の傾向を示す。礫種の割合の上位第５位は、ともに砂岩・泥岩・チャート・花崗岩類・ホルンフェルスの順で多く、それらで全体の94%（北壁）、あるいは85%（南壁）を占める。そのほか、安山岩・凝灰岩・緑色変質安山岩（グリーンタフ）・閃緑岩・混在岩などが少量含まれる。

これらの礫のうち、砂岩・泥岩・チャート・ホルンフェルス・混在岩は、松本盆地の西側山地に露出する「美濃帯ジュラ紀付加体」を構成する岩石に由来するものである。砂岩・泥岩は、東側山地の鉢伏山付近にも露出するが、岩質が緻密で堅硬な岩質から判断すると、西側山地から供給されたものと判断される。

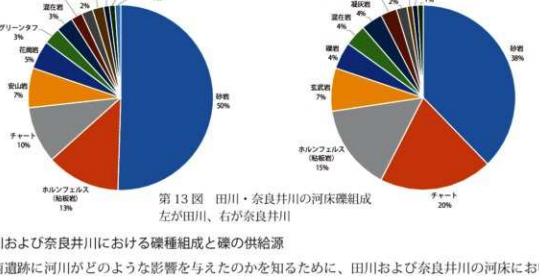
花崗岩類は、松本盆地の東側および西側の山地双方に分布する。出川南遺跡に花崗岩類の礫を供給する岩体は、東側では宮入山および高遠山周辺に分布する花崗閃緑岩（松本岩体）、西側山地では奈良井川最上流部に露出する「木曽駒花崗閃緑岩」である。両者のうち、分布域から考えて、松本岩体の花崗閃緑岩が主として花崗岩からなる礫の供給源になったと考えられる。

少量含まれる凝灰岩・緑色変質安山岩は東山のフォッサマグナ地域に分布する新第三系からもたらされたと考えられる。安山岩は、松本盆地南東部、塩尻峠周辺に分布する「塩嶺火山岩類」に対比される。

以上のように、出川南遺跡の砂礫層の礫は、主として松本盆地西側の山地からもたらされたが、一部は東側の山地、フォッサマグナ地域を構成する岩石も含まれると考えられる。



第 12 図　出川南遺跡砂礫層の礫組成
左が調査区（A 区東）北壁、右が同南壁



第 13 図　田川・奈良井川の河床礫組成
左が田川、右が奈良井川

3　田川および奈良井川における礫種組成と礫の供給源

出川南遺跡に河川がどのような影響を与えたのかを知るために、田川および奈良井川の河床において礫組成を検討した。河床礫を100個採集し、その礫種を肉眼で鑑定した結果は第13図のとおりである。

田川および奈良井川ともに、西側山地に露出する「美濃帯ジュラ紀付加体」からもたらされた砂岩・ホルンフェルス（泥岩起源）・チャートが、共通して上位３種を占めている。田川においては、安山岩・花崗岩類・緑色変質安山岩（グリーンタフ）などの、東側山地のフォッサマグナ地域に分布する岩石が15%ほど含まれる。東側山地からの礫の供給には、牛伏川の扇状地堆積物の役割も大きいのではないかと考えられる。

奈良井川では、上位３種に加えて、玄武岩・混在岩・礫岩・凝灰岩・石灰岩など、ほぼ全ての礫種がジュラ紀付加体を構成する岩石である。

田川では、その集水域のかなりの面積にフォッサマグナ地域の構成岩類が分布しているにも関わらず、付加体構成岩類が約80%含まれている。それは、田川が、塩尻市街地付近において奈良井川の扇状地堆積物を侵食して北流していることに起因しているのだろう。加えて、付加体構成岩類の礫の河川における摩耗耐性が一般的に高いこともその一因と考えられる。

4　出川南遺跡の礫の供給源

出川南遺跡の砂礫層の礫は、砂岩・泥岩（ホルンフェルス）・チャートなどの付加体起源の礫を主体とするが、花崗岩類・安山岩・緑色変質安山岩・凝灰岩など、東側山地のフォッサマグナ地域に分布する岩石を少量含む。この特徴は田川河床の礫組成に近く、出川南遺跡の砂礫層の礫の供給は、田川のように、付加体構成岩類を中心としながらも、東側山地由来の礫も運搬する河川によるものだったことを示している。

第６節　結語

第29次調査では古代の濃密な遺構分布が予想されたが、確認された遺構は近代の溝のみであったという結果であった。しかし、これは現在も使用されている四ヶ堰の流末である穴田川の痕跡であり、本書では四ヶ堰・穴田川を中心に触れてきた。既刊の本遺跡の報告書とは趣を異にする感はあるが、明治時代以降の先達の想いを顕在化させることができたとともに、当地区の近現代史についても触れることができたといえる。

当事業はＪＲ篠ノ井線の踏切道改良計画事業に先立つもので、その該当踏切は宮田前踏切という名称である。これはかつて本調査地を含めた一帯にあった、昭和戦前期に誘致された宮田製作所松本工場（現株式会社ミヤタサイクル）の前であったことに由来する。この道路改良が完了すると同踏切も廃止となり、「開かずの踏切」とも呼ばれた東西交通のネックが解消すると同時に踏切事故の不安が解消されることで利便性・安全性が飛躍的に向上する。その一方でまた一つ、昭和の痕跡が消えていくという点では感慨深いものがある。

最後に、本調査の実施に際して多大なるご協力をいただいた長野県松本建設事務所、並びに芳野町町会をはじめとした松南地区の地元関係者の皆様、そして猛暑から極寒まで半年間にわたる発掘調査に携わっていただいた作業員の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

参考文献

発掘調査報告書

1　小平和夫1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調報告書４－松本市内その１－総論編』長野県教育委員会、㈶長野県埋蔵文化財センター
2　松本市教育委員会1994『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群 －緊急発掘調査報告書－』
3　松本市教育委員会2000『長野県松本市 平田本郷遺跡Ⅲ －緊急発掘調査報告書－』
4　松本市教育委員会2000『長野県松本市 出川南遺跡Ⅴ －緊急発掘調査報告書－』
5　松本市教育委員会2014『長野県松本市 出川南遺跡 －第21次発掘調査報告書－』
6　松本市教育委員会2015『長野県松本市 出川西遺跡 －第10次発掘調査報告書－』
7　長野県松本建設事務所、長野県埋蔵文化財センター 2018『松本市出川南遺跡 －防災・安全交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

書籍等

8　長野県1936『長野県町村誌』南信編
9　宮沢志一1949「戦時下における長野県工業の展開」『信濃』第20巻２号信濃史学会
10　東筑摩郡 松本市・塩尻市郷土資料編纂会1965『東筑摩郡 松本市・塩尻市誌』第三巻 現代下
11　松本市芳川土地改良区1972『四ヶ堰百年の沿革』
12　長野県1972・1973『長野県政史』第二巻・第三巻
13　信濃毎日新聞「百年の歩み」編集委員会1973『百年の歩み―信濃毎日新聞』
14　芳川史談会1982『芳川の成り立ち』
15　長野県史刊行会1990『長野県史』通史編 第九巻 近代三
16　松本市1995『松本市史』第二巻歴史編Ⅲ 近代・第四巻 旧市町村編 Ⅰ
17　窪田雅之編著、秋櫻舎2011『近代松本地図集成』

現代遺物確認協力

1　協同乳業株式会社（WEBサイト含む）
2　明星食品株式会社（WEBサイト含む）
3　桂屋ファイングッズ株式会社（WEBサイト含む）

現代遺物参考WEBサイト（牛乳瓶年代観・ラーメン袋包装資材）

1　漂流乳業（http://www.citymilk.net/）
2　一般社団法人 日本即席食品工業協会インスタントラーメンナビ（https://www.instantramen.or.jp/）

写真図版

写真図版 1

第16次調査

調査区遠景(北側松本市総合社会福祉センター屋上から)

調査区完掘状況(西から)

溝1601礫出土状況(東から)

溝1601断面(南から)

第29次調査

溝2901一部完掘状況(西から)　胴木・石積みが部分的に残存し、南端部には用途不明の木組み遺構がある。

溝2901底部石積みと木組み遺構(東から)
石積みの下に木組み遺構が設置されていた。白○印は杭痕跡

溝2901完掘状況(南から)
カーブした先に現在の穴田川(暗渠)がある。
奥壁に見える土管は、川の埋め戻しに伴い排水などに用いられたものと考えられる。

溝2901堆積状況(南トレンチ　南から　写真合成の上掲載)
左手に4段の石積みがあるがここでは胴木は見えない。

溝2901堆積状況(北トレンチ　南から　写真合成の上掲載)
中央に近代土管、その左手下に胴木が見える。
南・北トレンチとも右手(東側)は非常に緩やかな流れによるシルト質の堆積。

写真図版 3

第16次調査土層堆積状況・第29次調査土層堆積状況１　Ｂ区

16次南壁土層(東半部　写真合成の上掲載)
南部場等造成に伴うとみられる整地土が厚く堆積し、その下層も近世の整地土が厚く堆積していた。左手中ほどに溝1601とした近世の層厚が、右手中ほどに溝1602の断面を確認することができる。

29次B区南壁土層(写真合成の上掲載)
昭和期の道路造成に伴うとみられる現代の整地土が厚く堆積していた。昭和30～40年代の遺物が出土した。

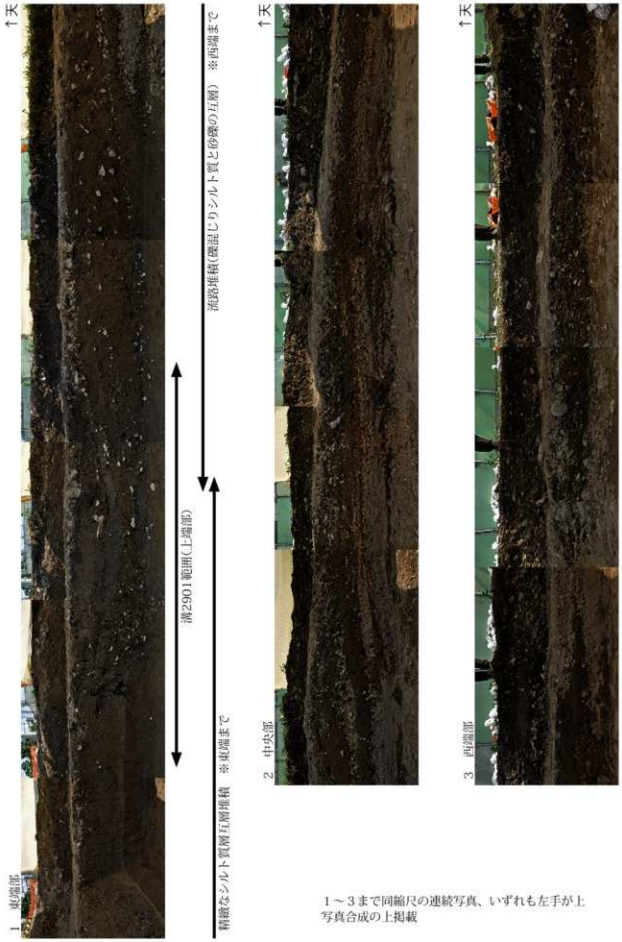
第29次調査土層堆積状況２　Ａ区東　東壁・北壁（溝2901部分）・南壁（溝2901部分）

東壁土層（写真合成の上掲載）
左端部は溝2901による落ち込み、上層に近世～近代の洪水性堆積が若干あるが、下層は安定した湿地（非常に緩やかな流路）性砂質シルト堆積。暗褐色の層が植物が繁茂した時期の堆積層。明黄褐色の層は流れがあった時期のもの、交互に堆積している。

南壁土層（溝2901部分）
中央部の落ち込みが溝2901、左側が安定した湿地性シルト質堆積の互層、右側の砂礫層とシルト質の互層は自然流路堆積。

北壁土層（溝2901部分　写真合成の上掲載）
中段中央部の窪みが溝2901の底部、その下層は安定した湿地性堆積で、左手（西側）からそれをえぐるように自然流路が流れた様子がわかる。

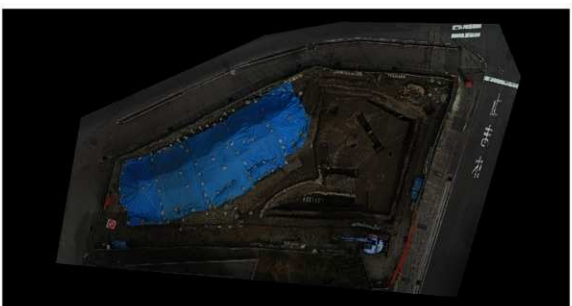
写真図版 5
第29次調査土層堆積状況３　Ａ区南壁（北から）



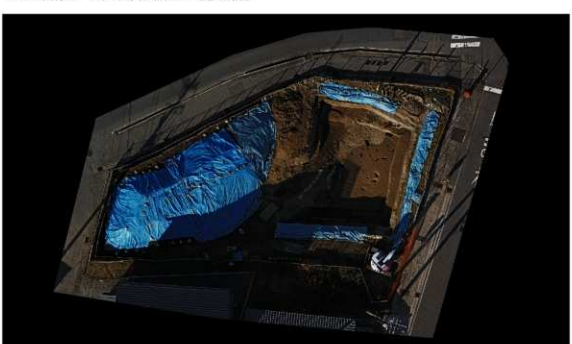
１～３まで同縮尺の連続写真、いずれも左手が上
写真合成の上掲載

第29次調査 オルソ画像

オルソ画像１　全景(左：B区、右：A区)



オルソ画像２　A区東小区(溝2901検出段階)



オルソ画像３　A区東小区(自然流路確認段階)

第16次調査 出土遺物

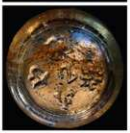
左　第16次調査試掘調査出土
　　土師器甕(一括)
　　古墳時代後期
右　第16次調査出土
　　土師器甕 他
　　古墳時代後期

第29次調査 出土遺物(古代～中世)

第29次調査出土
須恵器大甕・突帯付四耳壺・長頸壺・杯 他
古墳時代後期～平安時代前期

左　　第29次調査出土
　　土師器甕・黒色土器杯か椀 他
　　古墳時代後期～平安時代前期
右上　同出土白磁碗・四耳壺
　　平安時代後期～中世

第29次調査 近世～近代の遺物



左上　近世～近代陶磁器　溝2901出土 他
　　茶碗・急須・薩摩焼口・皿・徳利・鉢 他
左　　下駄型土製品　検出面 他
右上　「みや古染」 染粉ガラス瓶　溝2901覆土
右下　同上底面陽刻(左回りに「みや古染」、中央に「２」)

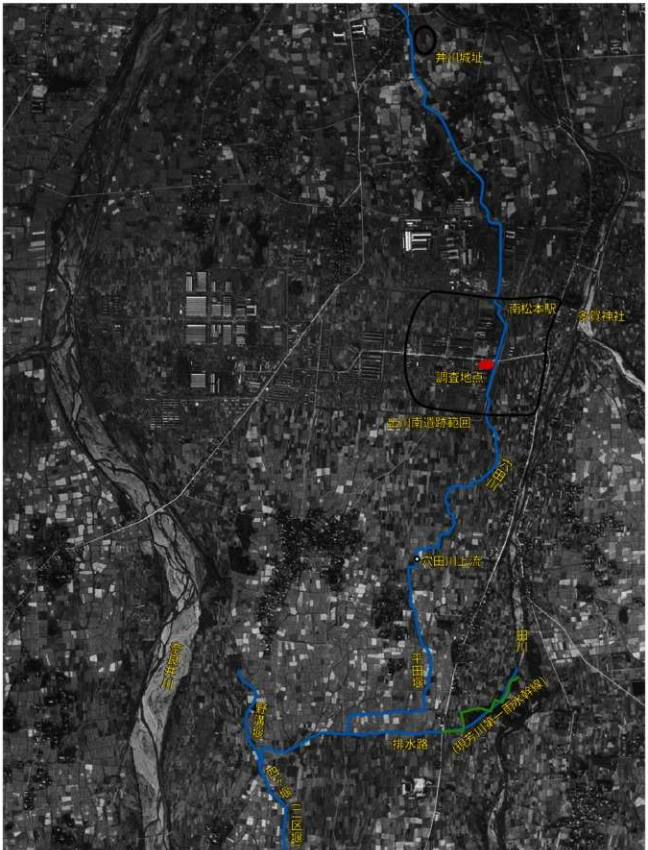
第29次調査 現代(昭和30 ～ 40年代)の遺物

上　スープ付き　明星ラーメン
　　包装袋表面
　　(昭和37.6発売)　※参考資料

上左　名糖牛乳瓶(昭和31 ～ 39)　180ccガラス瓶
　　ＮＳは名古屋精糖のロゴ
上右　名糖ホモビタ牛乳瓶(昭和39 ～ 49)　180ccガラス瓶
右上　同上　名糖牛乳ロゴ
右下　同上　「Meito Homo Vita Milk●」
　　●＝○囲み牛マークロゴ

写真図版 9

出川南遺跡と穴田川・四ヶ堰



昭和23年11月22日撮影米軍写真に加筆したもの

水色線が穴田川と四ヶ堰(平田堰)と排水路・野溝堰(一部)。写真左手に北流する奈良井川が見える。四ヶ堰は下端中央部付近から北に向かうと水田域が広がる。右手にある田川への排水路(現雨水渠:緑色線)、野溝堰などを分岐しながらさらに北上して穴田川となる。工業用地の縁で溝渠化して北上し、現在のやまびこ道路と交差する付近で現在の顕在化した穴田川となり、井川城址(北端中央右寄り)横を流れてさらに北上し、渚地籍で田川に注ぐ。

現在の四ヶ堰と穴田川

1　塩尻市広丘堅石の七ヶ堰取入口

2　塩尻市広丘堅石付近の四ヶ堰(北から)

3　塩尻市広丘原新田の深掘り部分(南西から)

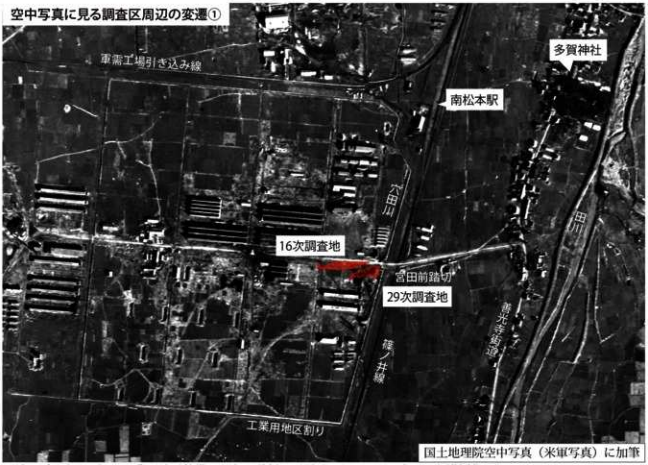
4　塩尻市北部公園の情景再現(堰は暗渠化)

5　塩尻市広丘吉田の円筒分水(二代目)

6　初代円筒分水古写真と南箕輪村の円筒分水(右上)

7　松本市市場の穴田川源流部(西から)

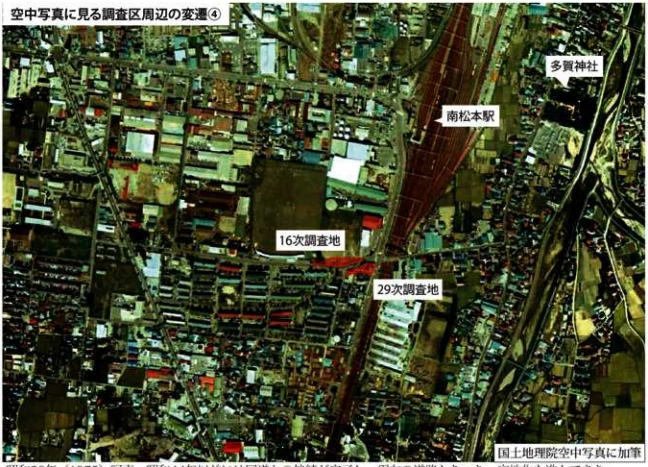
8　29次調査区北の穴田川(水は流れていない)



昭和23年（1948）　工業用地が整備、現在の道割の原型ができている。穴田川も溝渠化されている。

昭和33年（1958）　工業用地跡地南半に公営住宅が建ち、それに伴う道路整備が行われた。

昭和37年（1962）　国道19号線松本バイパス開通の前年、新道が国道と接続（一部未開通）した。



昭和50年（1975）写真、昭和44年以前には国道との接続が完了し、現在の道路となった。宅地化も進んできた。

出川南遺跡　発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　いでがわみなみいせき　だい16じ・だい29じはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	長野県松本市　出川南遺跡　第16次・第29次発掘調査報告書
副書名	
巻　次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№248
編著者名	大塚勉、草間厚伸、澤柳秀利
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所在地	〒390-8620　長野県松本市丸の内3番7号　TEL0263-34-3000（代） （記録・資料保管：松本市考古博物館　〒390-0823　松本市大字中山3738-1　TEL0263-86-4710）
発行年月日	令和6（2024）年1月31日（令和5年度）

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南遺跡	ながのけんまつもとし 長野県松本市 ふたば 双葉358番地 81他	20202	177	36度 12分 26秒	137度 58分 3秒	20110520 ～ 20110729	290㎡	踏切改良 出川双葉線
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古代 ～ 現代	溝址	2条	土器：在地		近世とみられる溝を確認した。	

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南遺跡	ながのけんまつもとし 長野県松本市 よしの 芳野358番地 49他	20202	177	36度 12分 26秒	137度 58分 5秒	20220701 ～ 20230123	89㎡	踏切改良 出川双葉線
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古代 ～ 現代	溝址 流路	1条 1条	土器：在地 陶磁器：瀬戸・美濃、白磁 ガラス器：牛乳瓶、染粉瓶		近代に造られた農業用水流末の河川跡を確認した。古代集落の空白地（流路）を確認した。	

要約

古墳時代を中心に遺構が多く存在する当遺跡の中にあって、遺物・遺構もほとんどなく、河川などの影響を受けた空白地帯ともいえる場所であることを確認した。

見つかった近代の遺構である溝址は、現在も流れる穴田川の旧流路であり、これは明治初期に開削された農業用水の流末部で、昭和戦前期に廃絶された水路でもあることがわかり、この地域の近代の開発についての資料を得た。

松本市文化財調査報告 №248

長野県松本市

出川南遺跡

－第16次・第29次発掘調査報告書－

発行日　令和6年1月31日

発　行　松本市教育委員会

〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印　刷　株式会社 二光印刷